十全同窓会会報 185

2023／9

目　次 | CONTENTS

就任挨拶……02
令和5年度十全同窓会総会開催…07
物故会員……08
総会記事……09
学長メッセージ……12
教授就任講演……13
受賞……16
第4回鈴木大拙―西田幾多郎記念
金沢大学国際賞授賞式および記念講演会…20
学会報告……21
御遺骨返還式・合同慰霊祭…23
論説……24
金沢から世界へ発信……25
病院紹介……26
教室・支部だより……28
医学展2023 ……35
クラス会……36
「生と死」を考える……38
キャンパスビジット2023…40
ホームカミングデイ開催…41

就 任 挨 拶

小林　　聡　博士
（平成２年卒業）

北陸の医療レベル向上に寄与し世界へ向けて情報発信

私は平成2年3月に金沢大学を卒業後、故高島力教授の主宰する放射線医学教室に入局し、画像診断、放射線治療、画像下治療（IVR）に関する研修を行うとともに大学院に入学し、病理学教室中沼安二教授のご指導のもと、肝細胞癌の経カテーテル的治療である肝動脈塞栓療法に関する基礎的研究にて学位を取得いたしました。

その後、北陸の基幹病院で放射線診断・IVRに関する臨床経験を積み、平成9年以降は金沢大学附属病院において肝臓の画像診断とIVRを中心に臨床及び研究を行ってまいりました。平成13年から2年間、松井修教授のご推薦により米国MDアンダーソンがんセンターの放射線診断科に留学し、肝動脈塞栓療法が血管新生に及ぼす影響の検討を行いました。帰国後は、新規MRI造影剤Gd-EOB-DTPAに関する研究や肝細胞癌の早期診断法の確立、肝細胞癌の亜分類と個別化治療への応用に関する研究を行ってまいりました。

平成27年には金沢大学保健学系教授に就任し、放射線科医の診療上の重要なパートナーである診療放射線技師の養成に従事しておりましたが、このたび、令和5年6月1日付で金沢大学医薬保健研究域医学系放射線科学講座の教授に就任いたしました。

今後は、初代平松博教授から第四代蒲田敏文教授をはじめ、教室の諸先輩方が築かれた伝統を基盤として、病院のインフラとして各科診療の支援を通して北陸の医療レベルの向上に寄与するとともに世界へ向けて情報発信し放射線医学の発展に貢献するため、教室員一丸となり臨床、教育、研究に邁進する所存です。

金沢大学十全同窓会の諸先生方には引き続きご指導、ご鞭撻を賜りますよう、何とぞお願い申し上げます。

金沢大学医薬保健研究域医学系放射線科学講座教授に就任

太田　邦雄　博士
（平成3年卒業）

医学教育の実践と研究、人材の育成にも尽力

この度令和5（2023）年7月1日付で金沢大学医薬保健研究域医学系医学教育研究センター教授を拝命致しました太田邦雄と申します。一言ご挨拶させていただきます。

私は平成3（1991）年に金沢大学医学部を卒業致しました。直ちに当時谷口昂教授主宰の金沢大学小児科学教室に入局し、小児科医としての第一歩を踏み出しました。また循環器グループに属して小児循環器医として研鑽する一方、平成4（1992）年には大学院に入学し、宮脇利男先生のもとで免疫学の分野で平成8（1996）年に学位を取得しています。

その後平成11（1999）年から2年間、カナダのトロント小児病院・Rabinovitch教授主宰の心血管研究部門にリサーチフェローとして留学し、基礎医学研究に専念する機会もいただきました。また留学中の経験、出会いから蘇生教育、心停止の疫学に関心を持ち、帰国後は小泉晶一、谷内江昭宏両教授の元で大学院生と共にそれらの発展にも取り組んできました。その間学内外でシミュレーション教育の実践と研究に携わるなど医学教育に関わってきたこともあり、縁あって2018年から医学教育研究センター准教授を経て、今回新たに設けられた教授を拝命致しました。

今後は引き続き金沢大学医学類の「人間性を重視し、かつ高度で総合点な能力を有する医療人・医学者の育成を図ることにより、世界の医療、健康、福祉に貢献する」という教育の理念のもと、医学教育の実践と研究、管理運営に精進するだけでなく、将来の医学教育を担う人材の育成にも尽力してまいる所存です。金沢大学十全同窓会の先生方には、引き続きご指導ご鞭撻を賜りますよう何とぞよろしくお願い申し上げます。

金沢大学医薬保健研究域医学系医学教育研究センター教授に就任

金沢大学腎臓・リウマチ膠原病内科学教授に就任

岩田　恭宜　博士
（平成14年大学院修了）

教室の理念を追求し、達成したい

令和5年9月1日付で、腎臓・リウマチ膠原病内科学教授を拝命いたしました。内科再再編により旧腎臓内科学と旧リウマチ膠原病内科学が統合され腎臓・リウマチ膠原病内科学となりました。もとより両科は、腎臓病、リウマチ膠原病の両領域の診療・研究・教育に携わることが多く、腎臓学会専門医、リウマチ学会専門医の両方を持つ医師も多く存在します。今回の再編により、これまで以上に効率的かつ強力に、腎臓病、リウマチ膠原病の診療・研究・教育を推し進めることができると確信します。今回を契機に、より一層、全人的医療とそれに基づく教育・研究を推進する所存です。

さらに、この統合を、教室が発展するための良い機会としたい、と考えています。内科医としての総合性を一層意識し、専門領域である腎臓病学、リウマチ膠原病学の垣根を取り払い、両領域の診療・研究を行います。幅広い疾患を診療することは、内科医としての基盤形成に非常に重要です。その上で、腎臓病、リウマチ膠原病の専門性をさらに伸ばします。また、これまでの研究課題、リソースを融合することで、新規性・独創性がたかい研究領域を開拓します。領域を超えた自由な発想のもと、腎臓病、リウマチ膠原病の新たな病態の解明や、シーズの臨床応用などを試みます。これまで両科が培ってきた知見や知的財産を融合し、発展させることで新たなステージに立ち、診療・研究・教育を進めていきたいと思います。

教室の理念は「腎臓・リウマチ膠原病内科学と患者の幸せに貢献する」としました。臨床家としての疑問を研究で検証し、さらに得られた研究成果を臨床に還元することで、腎臓病、リウマチ膠原病の克服、患者さんの福音につなげます。教育面においても、内科学の基礎、腎臓・リウマチ膠原病学の基礎を教育し、全診療科の内科的思考・診療技術の底上げに貢献します。課題に対して真理を追究し、新たな発見に胸躍らせる経験が、仕事に対する大きなモチベーションになります。皆が、常に未知への好奇心をもち、興味とやりがいを感じながら仕事を進めることができる教室を目指します。やる気と活気に満ち溢れた心で、教室の理念を追求し、達成したいと思います。

あらたな教室が益々成長するために、尽力する所存でございます。今後とも、皆さまにご指導をいただけますよう、よろしくお願い申し上げます。

就 任 挨 拶

金沢医科大学医学部長に再任

岩淵　邦芳　博士
（昭和59年卒業）

高まる臨床実習の重要性、実習の質向上に取り組む

1年前に金沢医科大学医学部長就任のご挨拶をさせていただきましたが、令和５年９月１日に金沢医科大学高島茂樹理事長から辞令を賜り、さらに2年間医学部長を務めることになりました。私は、昭和59年の卒業後、金沢大学第3内科に入局し、当時の松田保教授にご指導をいただきました。昭和63年に学位を取得し、3年間の留学を経て平成7年より金沢医科大学血液免疫内科に赴任しました。平成9年に金沢医科大学生化学Ⅰに移籍し、平成21年に伊達孝保教授の後任として生化学Ⅰの教授に就任いたしました。平成28年9月より6年間副学長を務め、令和5年4月に副学長再任となりました。

金沢医科大学医学部は、「生命への畏敬－Reverentia Vitae」という当大学の理念に基づいて、建学の精神に掲げられた「倫理に徹した人間性豊かな良医の育成」を目指しています。知識や技術だけでなく思いやりの心を兼ね備えた臨床医を社会に送り出すことが当学部の役割です。昨年度、医学教育モデル・コア・カリキュラムが改定されました。学ぶべき新たな疾患や手技も加わり、現在それらを来年度のカリキュラムに組み入れる作業を進めております。CBT、Pre-CC OSCEは今年度から公的化されました。Post-CC OSCEも、近い将来公的化が予定されております。さらに、医師国家試験のCBT化に向けた研究も進んでいると聞いております。医学教育は私たちが学んだ40年前とは大きく変わりました。医師国家試験では実際の診療現場での判断を問われる問題が多くなってきており、臨床実習の重要性がますます高まっていると感じています。診療参加型臨床実習のさらなる質向上に取り組んでいきたいと考えています。これからもよろしくお願い申し上げます。

金沢医科大学大学院医学研究科長に再任

米倉　秀人　博士
（会員Ⅱ）

大学院進学者の増加を重要課題として取り組む

このたび、金沢医科大学大学院医学研究科長の再任を拝命いたしました（2023年9月1日から任期２年間）。

私は1996年に金沢大学医学部生化学第二講座（山本博教授）に助教授として着任しました。大学院化により講座名が血管分子生物学研究部門となり、准教授として2006年3月まで在籍しました。2006年4月に金沢医科大学医学部生化学Ⅱ講座に講座主任として着任し、生化学の授業を担当してまいりました。2021年9月に大学院医学研究科長を拝命して2年間が過ぎ、このたび再任となりました。この間、金沢大学の皆さまにはたいへんお世話になりました。大学院では、「超少子高齢化地域での先進的がん医療人養成（北信がんプロ）」、「北陸認知症プロフェッショナル医養成プラン（認プロ）」、「医歯学工法連携による次代の法医学者および地域関連人材の養成（医歯工法プロ）」等で金沢大学さまには多大なご協力・ご助力をいただいております。この場を借りて厚くお礼を申し上げます。

金沢医科大学では近年、大学院への進学者が減少し、これは大学の研究アクティビティーに直結することから、大学院進学者の増加を最重点の課題として取り組んでいきたいと考えております。そのためには研究環境、指導体制をより充実させなければと責任を感じているところです。

金沢医科大学の教育・研究・診療はもとより、地域の医療や研究を維持しさらに発展させるためにも、金沢大学さまとの協力、情報共有が不可欠と考えております。今後とも何とぞよろしくお願い申し上げます。

此下　忠志　博士
（昭和61年卒業）

遺伝的体質に基づいた新たな生活習慣病診療の創出と実践

令和5年6月1日付で、東京女子医科大学八千代医療センター糖尿病・内分泌代謝内科教授を拝命しました。

東京女子医科大学八千代医療センター糖尿病・内分泌代謝内科 教授に就任

私は昭和61年に本学を卒業後、竹田亮祐教授ご主宰の第２内科学教室に入局し大学院に入学しました。東福要平先生、宮崎良一先生、紺井一郎先生のご指導のもとレニン-アンジオテンシン系に関わる研究で学位を取得しました。その後Pierre Corvol教授の主催するINSERM/College de Franceに留学し、レニン遺伝子転写機構研究に携わりました。帰国後、北陸先端科学技術大学院大学に所属し、当時馬渕宏教授ご主宰の古巣、金沢大学第2内科にて研究を継続させていただきました。平成12年から宮森勇教授ご主宰の福井医科大学第3内科にお呼びいただき研鑽を積みました。これまでの期間に、G-DOC研究と銘打った遺伝子コホート、遺伝子多型と臨床病態、網羅的発現遺伝子解析からのAT4の抽出等の研究を実施して参りました。同時に、内科学会、内分泌学会、糖尿病学会、腎臓学会、老年医学会、高血圧学会の専門医、指導医を取得しました。この経過の中で自らを修練するにより相応しい施設を模索しておりましたところ、長らくあこがれの大学でありました東京女子医科大学に、ご縁あって採用していただきました。この間、前述来の先生方をはじめ諸先生のご指導・助けが無ければ今日に至ることは無かったものと深く感謝しております。とりわけ山本博先生と中村裕之先生には深謝を申し上げます。

これからも竹田亮祐先生の教え、「自琢（みずからをみがき続ける）」と金沢大学十全同窓会の気概を胸に精進して参ります。先生方には今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

新明　洋平　博士
（特別会員）

地方からインパクトある研究成果の発信を目指して

この度、令和5（2023）年4月1日付で浜松医科大学医学部・神経生理学講座の教授を拝命いたしました。金沢大学医学部十全同窓会の先生方には謹んで就任のご挨拶を申し上げます。

浜松医科大学医学部神経生理学講座教授に就任

私は平成17（2005）年に徳島大学大学院工学研究科で学位を取得した後に熊本大学大学院医学薬学研究部・助教を経て、平成26（2014）年より金沢大学医薬保健研究域医学系・准教授を務めてまいりました。学位取得後は一貫して、脳神経系の発生と進化の分子メカニズムおよびそれらの生理学的意義の解明を目指し、さまざまなモデル動物を用いて分子発生医学研究を行ってまいりました。金沢大学では脳神経医学分野の河崎洋志教授の研究室で、フェレット大脳のシワ形成に関する研究に従事しました。独自に開発を進めた遺伝子機能解析技術を用いてこれまで仮説にとどまっていたシワ形成機構を実験的に次々と明らかにすることができ、大変エキサイティングな時間を過ごすことができました。また、超然プロジェクトの一環として、学内の多くの先生方との共同研究や国際シンポジウムの企画運営などにも参加し、大変貴重な経験させていただきました。河崎洋志教授をはじめとする脳神経医学分野の皆さま、さまざまな局面でご支援を受け賜りました金沢大学の多くの先生方にこの場をお借りして深く感謝申し上げます。

浜松医科大学は静岡県内唯一の国立医科大学であり、当大学の特色・強みである光技術を用いた先端的医学研究を精力的に展開しています。金沢大学で培った経験と知識を活かして臨床医や医学研究者の育成に貢献するとともに、浜松医科大学での研究環境を積極的に活用し独自の脳科学研究を世界に向けて発信できるよう精進していく所存です。金沢大学医学部十全同窓会の先生方には引き続きご指導、ご鞭撻を賜わりますよう、何とぞお願い申し上げます。

就 任 挨 拶

佐原　博之　博士
（Ⅱ会員）

佐原博之先生（Ⅱ会員）日本医師会常任理事にご就任

本同窓会Ⅱ会員の佐原博之先生（医療法人社団　和泉会　さはらファミリークリニック理事長・院長）が日本医師会の常任理事に就任されました。関係者一同、お喜び申し上げます。本同窓会関係の方として、岡良一先生が昭和25年に常任理事に選出されたとのことです。また、平成24年～平成28年に小森貴先生が常任理事としてご活躍されたことは、皆さまご周知のことかと存じます。

佐原先生の任期は、本年6月25日から2024年6月開催予定の日本医師会定例代議員会までとのことです。先生はこれまでに、日本医師会の種々の委員会等で活躍されておられ、昨年度から医療IT委員会委員長をお務めです。ご就任にあたり、“医療を取り巻く課題を一つ一つ解決していくには、日本医師会、都道府県医師会、郡市区医師会が組織として力を発揮する必要がある”、と表明されました。同窓会一同、先生のご活躍を祈念申し上げます。

（会報編集委員長　絹谷　清剛：記）

春の叙勲

瑞宝小綬章
野田　八嗣（昭和52年卒業）

旭日双光章
小林　文雄（昭和51年大学院修了）

瑞宝双光章
横山　鐵夫（昭和35年卒業）

令和5年度 十全同窓会総会開催

日時／令和5年7月1日（土）
場所／十全講堂

令和5年度の十全同窓会総会が、7月1日（土）午前9時より、十全講堂において開催された。

最初に山本健会長が開会の挨拶をされ、令和4年7月から令和5年6月までにご逝去の連絡があった物故会員（78名）に全員で黙祷を捧げた。

引き続き山本会長が議長を務め、議事に入った。まず、理事長の中村より令和4年度の会務報告がなされた。令和4年3月の卒業生は111名であったこと、現在会員総数（7106人）などが報告された。次に、杉山和久医学系長・医学類長から、医学類の現状および、放射線科学の蒲田敏文教授、整形外科学の土屋弘行教授の退職、消化器内科学の山下太郎教授、呼吸器外科学の松本勲教授、放射線科学の小林聡教授の新任が報告された。絹谷清剛大学院医薬保健学総合研究科長（代理、堀修医薬保健研究域長・学域長）より、大学院管理・運営体制、大学院教育、教育プログラムの現状などについて報告された。田嶋敦大学院先進予防医学研究科長より、大学院先進予防医学研究科大学院修了要件、教育プログラムなどが報告された。報告に続き、第21回高安賞の贈呈が行われた。齋藤健吾先生（脳神経医学、R5年度大学院）には最優秀論文賞、HEIN KO OO先生（内分泌・包括代謝学、R5年度大学院）には優秀論文賞、辻紀章先生（血液内科学、本学卒業 H26）には優秀論文賞が授与された。

参席された山形支部の森谷直樹先生（S47）、福島支部の竹田洋介先生（S60）、茨城支部の諸岡信裕先生（S48）、埼玉支部の久慈一英先生（H2）、神奈川支部の若杉春枝先生（S47）、静岡支部の岡井高先生（S52）、山梨支部の田邊譲二先生（S47）、富山県支部の泉良平先生（S47）、能登支部の吉村光弘先生（S56）、福井県支部の平井淳一先生（S51、副支部長）、京都支部の辻和夫先生（S53）、大阪支部の小林義幸先生（S62、支部長代理）、三重支部の原田資先生（S46）、岡山・香川支部の浅海浩二先生（H8）、高知支部の横田哲夫先生（S49）が紹介された。その後議事審議に移り吉崎智一会計理事から令和4年度事業および会計決算報告、竹田慎一監事より監査報告がされ承認された。また理事長の中村より令和5年度事業計画、及び吉崎会計理事より予算案の説明があり、承認された。特に令和5年度から、学術交流会を十全医学会と共催し支援することへの説明があり、承認された。役員改選では、監事の竹田慎一先生、篁俊成先生の再任、山下太郎先生、松本勲先生が新理事としての就任が承認され、太田哲生副会長の退任と、当面、後任の補充はしないことが承認された。中村理事長より会則改訂について説明があり、平成10年6月に準会員会費が年1,000円と設定され、4半世紀ほど据え置かれていたが、令和5年度の新入生より、年2,000円に変更することが承認された。続いて学生課外活動（西医体、医学展）に対する支援金授与が行われた。

学長メッセージ・教授就任記念講演

総会後には教授就任記念講演会が行われた。最初に学長メッセージとして和田隆志学長が『金沢大学未来ビジョン「志」』と題し、ご講演された。引き続き、矢野聖二教授が「肺がん薬物療法の体制克服への挑戦」、山下太郎教授が「肝発癌の分子機構と新規診断治療薬の開発に向けて」、松本勲教授が「胸部悪性腫瘍に対する拡大手術と低侵襲性手術の融合を目指して」と題した研究紹介をされ、参加者一同、新進気鋭の先生方のご活動と成果に感銘を受けながら聴き入った。

（十全同窓会理事長　中村　裕之：記）

物故会員

（令和４年９月～令和５年８月の連絡）

瀧　邦彦	昭和19年卒業
宮地　敏郎	昭和19年専卒業
中村　正夫	昭和20年専卒業
三木　久也	昭和20年専卒業
三﨑　孝藏	昭和23年専卒業
石瀬　正隆	昭和25年卒業
土田　壽	昭和25年専卒業
中川　昭雄	昭和25年専卒業
向坂憲一郎	昭和25年専卒業
村田　敏夫	昭和25年専卒業
井川　和夫	昭和26年卒業
丹尾　太	昭和26年卒業
金田　亮	昭和27年卒業
東　弘	昭和29年卒業
木村　良平	昭和29年卒業
斉藤　昌道	昭和29年卒業
高邑　昌輔	昭和29年卒業
二口喜八郎	昭和29年卒業
北川　勲	昭和30年卒業
﨑田　重康	昭和30年卒業
竹田　剛夫	昭和30年卒業
高櫻昭六郎	昭和30年卒業
横井　健	昭和30年卒業
齋藤　和哉	昭和31年卒業
米島作三郎	昭和31年卒業
安達　弘章	昭和32年卒業
川西　弘	昭和32年卒業
杉山　正彦	昭和32年卒業
竹下　正純	昭和32年卒業
藤田　進	昭和32年卒業
森越　進	昭和32年卒業
坂本　信義	昭和33年卒業
竹山　惣一	昭和33年卒業
浜屋　修	昭和33年卒業
林　松夫	昭和33年卒業
三木　甫	昭和33年卒業
小林　淳介	昭和34年卒業
田丸　忠良	昭和34年卒業
打波六兵衛	昭和35年卒業
塩之谷　昌	昭和35年卒業
布谷　猛	昭和35年卒業
岩本　實	昭和36年卒業
加藤　敝司	昭和36年卒業
小林　清二	昭和36年卒業
多田　信平	昭和36年卒業
松本　由朗	昭和38年卒業
小阪　憲司	昭和40年卒業
藤本啓太郎	昭和40年卒業
三輪　梅夫	昭和40年卒業
松田　芳郎	昭和41年卒業
村本　信吾	昭和42年卒業
杉野　實	昭和43年卒業
加藤　寛幸	昭和44年卒業
中村　勉	昭和45年卒業
成　照信	昭和46年卒業
村上　健治	昭和46年卒業
永井　晃	昭和46年卒業
浅野　健	昭和47年卒業
池田　周紹	昭和47年卒業
全田　貞雄	昭和47年卒業
森田　明人	昭和47年卒業
勝川　和彦	昭和48年卒業
桃井　文夫	昭和48年卒業
木村　文隆	昭和49年卒業
栗原　真	昭和50年卒業
黒田　岳雄	昭和50年卒業
吉川　隆啓	昭和51年卒業
吉田　和代	昭和52年卒業
中野　利美	昭和55年卒業
山上　文良	昭和55年卒業
大村　繁夫	昭和56年卒業
齋藤　研一	昭和58年卒業
西脇太記朗	平成7年卒業
大田　聡一	平成23年卒業
近藤　恵信	大学院
小野　武年	大学院
加勢　満	大学院
尾島　敏夫	Ⅱ会員
木下　善光	Ⅱ会員
関川　博	Ⅱ会員
田中　廣昌	Ⅱ会員
壇原　宏	Ⅱ会員
堤　次雄	Ⅱ会員
中原　爽	Ⅱ会員
藤沢　昭三	Ⅱ会員
松本　憲昌	Ⅱ会員
宮崎憲太郎	Ⅱ会員
山田　清夫	Ⅱ会員
吉田公乃利	Ⅱ会員

（敬称略）

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。
会員のご不幸は当会にご一報をお願いいたします。

総 会 記 事

令和４年度決算報告ならびに令和５年度予算について

令和4年度決算

表１に一般会計の決算書を示す。会費収入は減少傾向であったが、その減少幅は最小限なものとなった。本年度も会報編集委員会による広告収入（自助努力）があった。支出は新型コロナ感染症拡大の影響に伴い、学生課外活動補助、支部への補助が削減された。全体として会費収入は低迷のままであるものの、広告収入によりなんとか支出とのバランスをとっている。付随する特別会計では、十全同窓会基金会計収入は資産運用で得た利息があった。また高柳奨学金は、奨学生の１名の採用であった（表2～4参照）。

令和５年度予算

会費、広告収入は努力目標を計上した。会費納入率は長期にわたり40％台が持続しており、納入率向上の努力が必要とされている。新入会員の納入率低下は、昨年から比べると上昇傾向に転じた（図）。引き続き学類在籍中から多方面で働きかけることにより、帰属意識の向上を図り、新入会員の納入率をさらに増加させることを目指す。昨年度から新規事業として開始した医学類４年生へのドクターコート贈呈にかかる予算を引き続き計上した。また会費納入方法には選択肢（振替用紙・自動振替・ネットバンキング）の周知を続けている。名簿会計支出には名簿改訂・発送にかかった支払予定金額を計上した。高柳奨学金は、奨学生１名の採用予定である。

（会計担当　吉崎　智一：記）

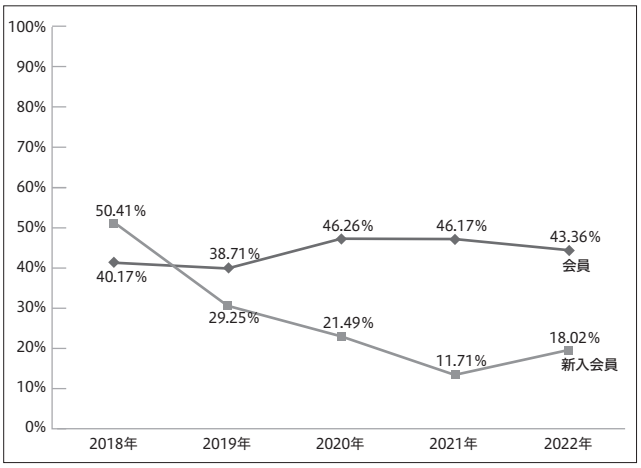


図　過去5年間の会費納入率と新入会員の納入率の推移

会計監査報告書

ご寄附をいただきました

同窓会活動にご賛同賜り、深くお礼申し上げます。

愛知支部

故 三木 甫（昭和33年卒業）

宗 瑞照（昭和25年専門卒業）

総 会 記 事

表1　令和4年度決算書

自　2022年 1月 1日
至　2022年12月31日

収入				支出			
科　目	予　算(円)	決　算(円)	摘　要(円)	科　目	予　算(円)	決　算(円)	摘　要(円)
前年度繰越金	3,170,755	3,170,755		事業費	7,146,145	6,971,031	会報・総会ﾁﾗｼ編集・印刷・製本・封入代　3,447,241
							会報発送代・理事会関係発送　1,769,955
							便箋　52,800
							会報発送封筒　295,460
会費収入	12,097,000	10,531,000	令和4年度会費				十全医学会学術交流会支援　130,000
			4,000円×1,712人				関連病院長会議・関連病院渉外費　200,000
			過年度分　263人				新入会員卒業祝（USBメモリー）@2,255×111個　250,305
			令和4年度以降　14人				ドクターコート贈呈医学類4年生　705,370
			準会員会費　6,000円×99人				会員情報ｻｲﾄ管理　追加作業　53,900
			5,000円×1人				北陸銀行ビジネスIBスタンダード基本料　66,000
雑収入	500,000	556,000	会報掲載広告収入	旅　費	1,300,000	348,080	
			50,000円×4社　200,000	慶弔費	100,000	34,834	弔電・生花
			36,000円×1社　36,000	会議費	480,000	212,635	総会、理事会、会報編集委員会
			30,000円×4社　120,000	補助費	170,000	120,000	西医体補助　100,000
			寄附（さんご会）　200,000				医学展補助　0
							「大学院医学系研究科」進学説明会補助金　20,000
				事務費	4,300,000	4,035,082	会費払込料金、パソコン・プリンターメンテナンス等一式・通信費、各手数料、文具、振込手数料　735,082
利　息		6					
							人件費　3,300,000
				支部への補助費	500,000	90,000	
				予備費		500,000	
				繰越金	1,771,610	1,946,099	
計	15,767,755	14,257,761		計	15,767,755	14,257,761	

表2　令和4年度　十全同窓会基金会計

自　2022年 1月 1日
至　2022年12月31日

収入			支出		
科　目	金　額(円)	摘　要(円)	科　目	金　額(円)	摘　要(円)
前年度繰越金	45,098,400				
利　息	45,987	利付国債/定期預金			
計	45,144,387		計	0	残高　45,144,387

表3　令和4年度　十全同窓会名簿作成会計

自　2022年 1月 1日
至　2022年12月31日

収入			支出		
科　目	金　額(円)	摘　要(円)	科　目	金　額(円)	摘　要(円)
繰越金	3,873,274		通信費	355,753	名簿発送費
協賛金	410,000	免除会員	名簿作成費	5,159,440	田中昭文堂印刷
広告料	2,032,800	福田商店	事務費	648,900	払込手数料・名簿入力作業代金
計	6,316,074		計	6,164,093	残高　151,981

表4　令和4年度　高柳奨学金会計

自　2022年 1月 1日
至　2022年12月31日

収入			支出		
科　目	金　額(円)	摘　要(円)	科　目	金　額(円)	摘　要(円)
前年度繰越金	3,640,176		奨学金	300,000	令和4年度　奨学生1名（25,000円/1ヶ月）2022年4月～2023年3月分
利　息	51	定期預金利息		300,000	令和4年度　無利子貸与学生1名（25,000円/1ヶ月）2022年4月～2023年3月分
			事務費	440	残高証明発行手数料
計	3,640,227		計	600,440	残高　3,039,787

表5　令和5年度　予算書

自　2023年 1月 1日
至　2023年12月31日

収入			支出		
科　目	金　額(円)	摘　要(円)	科　目	金　額(円)	摘　要(円)
前年度繰越金	1,946,099		事業費	7,346,509	会報・総会ﾁﾗｼ編集・印刷・製本・封入代　3,500,000
					会報・理事会関係発送　1,800,000
会費収入	11,197,000	令和5年度会費			発送用封筒代・会費払い込み用紙　300,000
		4,000円×1850人　7,400,000			関連病院長会議・関連病院渉外費　200,000
		過年度分　2,800,000			新入会員卒業祝（USB）@2,343×123本　288,189
		令和5年度以降　300,000			ホームページ会員情報サイト管理　220,000
		準会員会費　6,000円×112人　672,000			北陸銀行Web基本料　66,000
		5,000円×5人　25,000			ドクターコート贈呈（医学類4年生：SD認定証書授与式にて）　772,320
					男性用　@6,680×89着（大学名刺繍込み）
雑収入	700,000	会報掲載広告収入、事務手数料、利息			女性用　@6,350×28着（大学名刺繍込み）
					第5回　学術交流会（十全医学会）　200,000
			旅　費	1,000,000	各支部総会出張旅費、各支部長総会招待旅費
			会議費	480,000	総会、理事会、会報編集委員会
			慶弔費	100,000	弔電・生花
			補助費	170,000	学生課外活動補助
					医学展　50,000
					西医体　100,000
					金沢大学大学院医薬保健総合研究科（修士課程及び医学博士課程）・
					先進予防医学研究科　進学説明会補助　20,000
			事務費	4,300,000	会費払込料金、パソコン、プリンター修理等一式・感光体・トナー、
					通信費、証明書発行手数料、文具、振込手数料　1,000,000
					人件費　3,300,000
			支部への補助費	400,000	
			予備費	46,590	
計	13,843,099		計	13,843,099	

表6　令和5年度　十全同窓会基金会計　予算

自　2023年 1月 1日
至　2023年12月31日

収入			支出		
科　目	金　額(円)	摘　要(円)	科　目	金　額(円)	摘　要(円)
前年度繰越金	45,144,387				
利　息	45,996	利付国債			
計	45,190,383		計	0	残高　45,190,383

表7　令和5年度　十全同窓会名簿作成会計　予算

自　2023年 1月 1日
至　2023年12月31日

収入			支出		
科　目	金　額(円)	摘　要(円)	科　目	金　額(円)	摘　要(円)
繰越金	151,981		事務費	20,000	手数料、名簿発送料・郵便料
計	151,981		計	20,000	残高　131,981

表8　令和5年度　高柳奨学金会計　予算

自　2023年 1月 1日
至　2023年12月31日

収入			支出		
科　目	金　額(円)	摘　要(円)	科　目	金　額(円)	摘　要(円)
前年度繰越金	3,039,787		奨学金	300,000	令和5年度奨学生　1名　¥25,000×12カ月（2023.4月～2024.3月）
貸付返済	300,000	令和2年無利子貸付返済	事務費	440	残高証明発行手数料
利　息	51	定期預金利息			
計	3,339,838		計	300,440	残高　3,039,398

学長メッセージ

講演される和田隆志学長

金沢大学未来ビジョン「志」

本学医学系教授和田隆志先生が2022年4月1日付で金沢大学第12代学長に就任されてから早1年半が経過しました。本年の総会には、金沢大学未来ビジョン「志」を掲げてご活躍の和田学長をお招きし、「学長メッセージ」と題してご講演を賜りました。

先生は金沢大学の未来ビジョンとして、１．研究：独創的な世界トップレベルの研究展開による世界的研究拠点の形成。総合知・未来知による社会変革を目指し、オール金沢大学で融合研究と実証研究を進める。２．教育：社会の中核的リーダーたる“金沢大学ブランド人材”の輩出。３．経営：人・知・社会の好循環を作り出す持続可能で自律的な運営・経営の実現。の３本の柱を示され、その各々について、実現に向けての具体的な施策を示されました。

元麻酔科医の私の目を引いた施策として、附属病院の「第2中央診療棟」整備事業が挙げられます。手術室の拡充、手術と血管造影が同時に可能なハイブリッド手術室、術中MRI検査が可能な手術室など、最先端の医療を可能にする事業です。このような新規事業が増えると、附属病院に勤務する医師の過重労働が気になります。これに対しては、医師の働き方改革に向けた取り組みとして、１．ビーコン自動打刻型勤怠管理システム、２．VR（仮想現実）臨床研修システムの導入によって、勤務時間管理の負担を最小限に抑制し、研修医や若手医師の技術的な指導に要する時間を削減するとの心強いご説明がありました。

未来ビジョン「志」の具体的な施策は膨大であり、とてもこのスペースではご紹介できません。学長のご講演を拝聴した同窓会会員、特に各支部から出席された支部長の皆さんからは、「学長メッセージを拝聴し、未来知を満喫させて頂きました。素晴らしい金沢土産となりました」、「和田学長の金沢大学未来ビジョン「志」についての、素晴らしいご講演は、まさに目からうろこでありました。金沢大学の今後を占う先進的なビジョンは、まさに、金沢大学が日本のみならず、国際的にもイニシアティブを持ちながら前に進む、絶好のきっかけとなるものと思います」との賛辞が寄せられました。

和田学長は、支部会員の皆さまに親しく未来ビジョン「志」をご紹介し、皆さまのご意見をお聞かせ頂きたいと望んでおられます。今後の支部総会に、学長をお招きすることを支部長さんにお願いしているところです。そのような支部総会が実現できましたら、多くの支部会員の皆さまにご出席いただくようお願いいたします。

（十全同窓会会長　山本　　健：記）

教 授 就 任 講 演

肺がん薬物療法の耐性克服への挑戦

呼吸器内科学　矢野　聖二

肺がんはわが国のがん死亡原因の第一位であり、その死亡者数は未だ減少に転じていない。その一方で、分子標的薬や免疫チェックポイント阻害薬（ICI）の導入により進行期肺がんの治療は大きな進歩を遂げた。特に、ドライバー遺伝子異常をコンパニオン診断とした分子標的薬の開発は目覚ましく、EGFR，ALK，ROS1，BRAF，MET，RET，KRASの遺伝子異常陽性非小細胞肺がん（NSCLC）に対する分子標的薬が承認され、さらにHER2遺伝子異常陽性症例に対しても有望な薬剤の臨床開発が進んでいる。一方で、ドライバー遺伝子異常陰性NSCLCにはICIを主軸に殺細胞性抗腫瘍薬や血管新生阻害薬を併用した複合免疫療法が主体となっている。ICIを主体とした治療では、一部に治癒に近い生存期間延長効果が得られる症例があるが、無効症例も多く、間質性肺障害などの重篤な副作用が発生し治療継続が困難になる場合も少なくない。分子標的治療は、奏効率が高く多くの症例で一旦腫瘍が縮小するが一部が抵抗性腫瘍として残存し、治療の継続にもかかわらず耐性化して徐々に増大し再燃することが次なる臨床的問題となっている。

発表者は2007年に金沢大学がん進展制御研究所腫瘍内科に赴任して以来、肺がんの分子標的薬耐性の克服を目指し、基礎および臨床研究を行い、2021年11月に呼吸器内科学に異動後もこれらの研究を継続している。分子標的薬の耐性機構としては、標的の変化（耐性変異）、側副経路の活性化（標的以外の受容体の活性化による生存シグナルの補完）、他のドライバー変異の発生、細胞形質変化、血液脳関門による薬物移行制限を含む多くのメカニズムが知られており、発表者は、肝細胞増殖因子（HGF）がMET受容体を活性化しEGFR阻害薬の耐性を惹起することなどを報告してきた。また、EGFR阻害薬にさらされたEGFR変異肺がん細胞がチロシンキナーゼ型受容体であるAXLやインスリン様成長因子1受容体（IGF-1R）を活性化させることで生き延びて抵抗性腫瘍を形成しうることを明らかにしている。この基礎研究成果をもとに、EGFR変異肺がんにおいてEGFR阻害薬（オシメルチニブ）にAXL阻害薬を上乗せする安全性を評価する企業主導治験が実施されており、その結果に期待したい。

本講演では、日進月歩である肺がん薬物療法の概要と、耐性克服を目指し行ってきた研究内容を紹介したい。

教授就任講演

肝発がんの分子機構と新規診断治療薬の開発に向けて

消化器内科学／システム生物学 山下 太郎

肝臓は人体最大の固形臓器であり、蛋白合成、糖代謝、脂質代謝、アミノ酸代謝、薬物代謝、胆汁酸生合成、など人体維持に必須の役割を果たしていることから、人体最大の化学工場とたとえられる。肝細胞がんは正常な肝臓から発生することは稀であり、繰り返す肝細胞の壊死、炎症、再生を背景に遺伝子変異が集積し、免疫担当細胞、線維芽細胞、血管内皮細胞の活性化、機能異常を伴う慢性肝疾患から発がんする場合が多い。現在世界では年間約91万人が肝細胞がんを新規に発症し、死亡数は年間約83万人に達する、世界第2のがん死亡原因である。これまでは、多くがB型肝炎ウイルス、C型肝炎ウイルス感染を背景に慢性肝炎、肝硬変をその発症母地としてきたことから、肝炎ウイルスの高浸淫地域であるアジア、アフリカで高頻度に認められるがんであった。しかしながら、肝炎ウイルス対策および診断薬、治療薬の開発が進み、肝炎ウイルス関連肝細胞がんの発症は本邦では約50％以下まで低下してきている。代わりにアルコールや糖尿病、脂肪肝といった生活習慣病を背景に発症する非B非C型肝細胞がんが増加しており、特に先進国において問題となっている。

従来はB型肝炎ウイルス、C型肝炎ウイルス感染が強力な肝発がん危険因子であることから、ウイルス性慢性肝炎、肝硬変患者を対象に肝がん腫瘍マーカー測定および肝画像診断検査によるサーベイランスを定期的に行うことで肝細胞がんの早期発見を行うことが可能であった。しかしながら、抗ウイルス薬によりC型肝炎ウイルスの駆除、B型肝炎ウイルスのコントロールが可能となり、その発がんリスクは1/3～1/5まで低下している。同様に、最近の非B非C型肝細胞がんでは、糖尿病で2倍、アルコール常習飲酒家で2倍、BMI30以上の肥満で2倍、とそれぞれのハザード比が肝炎ウイルス感染ほど強くはないこと、対象患者数が1000万人を超えることから、全例にサーベイランスを行うことは医療経済の破綻につながりかねない。簡便かつ十分なハザード比を有する新たな肝発がん予測マーカーの開発が求められている。

我々は基底膜成分の一種であるラミニンに着目、ラミニンγ2は正常ではα、βと3量体を形成するにも関わらず慢性肝炎、肝硬変、肝細胞がん患者血清中には単鎖で検出可能であることを明らかにしてきた。また、ラミニンγ2単鎖は従来の肝がん腫瘍マーカーであるAFPやPIVKA-IIとは独立したマーカーであること、とくに上皮間葉転換の特徴を有する幹細胞様の特徴を有する肝がん細胞（間葉系肝がん幹細胞）で発現していること、血清ラミニンγ2単鎖上昇患者では根治術後の遠隔転移が治療後3年以内に40％程度で認められることを明らかにし、世界初の肝がん遠隔転移予測マーカーになりうる可能性を示した。さらに、C型肝炎ウイルス治療後の慢性肝炎、肝硬変患者の約30％程度において、血清ラミニンγ2単鎖が上昇していること、血清ラミニンγ2単鎖の上昇はハザード比が約20倍と最も危険が高く、かつ肝線維化やAFP上昇とは独立したマーカーであることを見出した。現在生活習慣病患者も含めて、のべ8000人で血清ラミニンγ2単鎖測定が肝発がんの危険因子となるか、前向き多施設共同研究で検証中である。

これまでに肝発がんを予防することが可能な治療薬は開発されていない。我々は血清ラミニンγ2単鎖測定技術により同定された、肝発がん高危険群に対する発がん予防薬の研究を進めている。Hepatocyte Nuclear Factor 4α（HNF4α）は肝細胞の核内に存在し、蛋白合成、糖代謝、脂質代謝、アミノ酸代謝、薬物代謝に関わる遺伝子発現を制御するマスターレギュレーターとして知られている。さらに、HNF4αは細胞周期を負に制御することで細胞分裂を止める働きがあり、がん抑制遺伝子として働くことが報告されている。現在我々はHNF4αに結合し活性化することで肝細胞における遺伝子変異の集積を抑制し、肝発がんを抑制する全く新たな構造を有する治療薬の開発を行っており、有望な化合物候補を複数得ている。肝発がんを高感度、特異度で予測する血清診断マーカーの開発、肝発がん高危険群に対し遺伝子変異の集積を抑制し発がんを予防可能な治療薬の開発を進めることで、全世界の肝細胞がんで苦しむ患者さんへ新規診断治療薬を届けることができるよう、研究を進めている。

胸部悪性腫瘍に対する拡大手術と低侵襲手術の融合を目指して

呼吸器外科学　松本　勲

呼吸器感染症、特に肺結核との戦いで発展してきた呼吸器外科学は、今や胸部悪性腫瘍制御がその主流となり、肺感染症で培われた手術の技術が臨床応用されている。胸部悪性腫瘍、特に原発性肺癌の予後は不良で、さまざまな外科療法、放射線療法、薬物療法が開発されてきたが、現状では未だ手術が唯一の根治治療である。

私の研究や臨床のテーマの一つに、「切除不能とされる悪性腫瘍でも根治し、患者が社会生活に復帰しうる手術法の開発」がある。そのテーマを心に抱き始め、呼吸器外科学のダイナミズムや奥深さを実感したのは、学位研究として行った「肺門部進行肺癌に対する体外肺切除（自家肺移植）術」の開発研究である。体外肺切除術は癌とともに片肺を体外に摘出し、病巣を切除後、残存肺を自家移植する手技である。体外肺切除術において、リンパ節郭清の度合いと気管支吻合部の創傷治癒の関連性を評価し、リンパ節郭清の範囲が広いと気管支吻合部血流が低下するため気管支吻合部を生体組織で被覆し気管支縫合不全を抑制する必要性があることを示した。この研究を機に拡大手術に魅了されることになった。臨床では、進行胸部悪性腫瘍に対し、気管支形成、肺動脈形成、胸壁合併切除などを併用した拡大手術を積極的に行い、また他科と協力し、大動脈や上大静脈などの大血管合併切除、広範囲な椎骨合併切除などの通常は切除を断念する拡大手術も行い、他施設をリードしてきた。拡大手術に伴い、気管や横隔神経を合併切除せざるを得ない場合があるが、前者にはGlutaraldehyde固定処理自家心膜による気管再建法を、後者にはchitosan tubeによる神経再生法を開発した。

近年、薬物療法や放射線療法の進歩は目覚ましく、特に薬物治療では、従来の殺細胞性抗癌薬に加え、分子標的治療薬および免疫チェックポイント阻害薬が登場し肺癌患者の予後は大幅に改善するようになった。例えば、切除不能非小細胞肺癌に対する根治的化学放射線療法後のDurvulumabによる地固め療法（PACIFIC trial）では、5年全生存率42.9%、無再発生存率33.1%と外科療法に匹敵する優れた治療効果を示している。このような症例の中には切除不能と考えられていたが、限局的に病変が残存し切除可能となるsalvage手術や治療途中で切除可能と判断するconversion手術を行える症例が出てきている。金沢大学ではこのような症例に対しても、呼吸器内科や腫瘍内科と連携し積極的にsalvage手術やconversion手術を行い、北陸最後の砦としての役割を果たしていかなければならない。

一方、1990年代から胸郭破壊を極力低減する胸腔鏡などを用いた低侵襲手術（VATS）が進歩してきた。2000年代に入り、多孔式VATSは爆発的に全世界に普及した。また、ロボット手術は2000年当初から応用が始まり、金沢大学でも2010年にいち早く臨床で開始したが、経済的な問題から普及に至らなかった。しかしながら、2018年に肺癌に対する肺葉切除と縦隔腫瘍手術、2020年に肺癌に対する区域切除と重症筋無力症に対する胸腺摘出術の4術式が保険適応となったため本邦で急速に普及し、私もロボット手術プロクターとして他施設で指導を行っている。低侵襲手術のもう一つの新しい潮流として単孔式VATSが欧州とアジアを席捲しつつある。単孔式VATSは4cm以下の創1か所から胸腔鏡、手術器具を挿入し手術を施行する手技である。単孔式VATSでは使用する肋間が1か所であるため、肋間神経痛を軽減でき、術後の回復も早い。金沢大学でも積極的に単孔式VATSを行っており、本邦における単孔式VATSの普及に尽力している。最近では、ロボット手術でも単孔式で手術を行う新しいロボットが開発され臨床に応用する臨床試験が開始される予定である。

低侵襲手術の開発は胸郭に対してのみ行われているのではない。肺癌に対する標準手術は肺葉切除とリンパ節郭清であるが、2022年に発表されたJCOG0802他施設共同研究（金沢大学も参加）では、腫瘍径2cm以下の肺癌では5年全生存率で区域切除が葉切除を上回る結果となり、今後肺癌に対する区域切除が増加することが予想される。しかし、区域切除は葉切除より手技が煩雑で、区域間の同定も難しい場合がある。このため我々は、Vitamin B2を蛍光物質として用い、区域を同定する方法を開発した。Vitamin B2はセンチネルリンパ節の同定にも有用であり、これらの方法を臨床応用していきたいと考えている。

一見異なるベクトルにある拡大手術と低侵襲手術であるが、両者の融合こそが「切除不能とされる悪性腫瘍でも根治し、患者が社会生活に復帰しうる手術法」なのであり、そのためには手術技術の質を高めるだけでなく、新しい安全で革新的な手術法を開発し、金沢大学から世界に発信していきたいと考えている。

研究面では、臓器移植・再建・再生、低侵襲治療、胸部悪性腫瘍制御、新しい手術治療法・検査法の開発、の4基軸で研究を進め、教育面では、学生・研修医に呼吸器外科学の魅力を伝えるとともに、「自分が診てもらいたい」と思う医師像を目指すよう啓発したいと考えている。また大学院教育なくして科学的思考を有する優秀な研究者・臨床医の育成は困難であり、臨床に立脚した基礎的・臨床的研究を推進し、世界に通じるacademic surgeonの育成に努める所存である。

受　　賞

令和５年度科学技術分野 文部科学大臣表彰科学技術賞 研究部門受賞

後藤　典子（平成元年卒業）
金沢大学がん進展制御研究所分子病態学

この度、研究課題「がん幹細胞が維持される微小環境の仕組み解明の研究」が令和5年度科学技術分野文部科学大臣表彰科学技術賞研究部門を受賞しましたので、謹んでご報告いたします。

がんは日本人の死因第一位です。いわゆる「がん幹細胞」ががん組織を作り出すと考えられておりますが、がん幹細胞が維持される仕組みには不明な点が未だ多くあります。私は15年にわたって乳腺外科の先生方のご協力をいただき、乳がん患者さんのがん組織を用いたスフェロイドやオルガノイド培養の技術を工夫するとともに、患者さん由来がん組織を免疫不全マウスに移植するPatient-derived xenograft（PDX）モデルを構築してきました。これら患者さんのがんに最も近い性質を持つ貴重なリソースを活かして、がん幹細胞が炎症性の微小環境「がん幹細胞ニッチ」を作り出すことによって、治療抵抗性を獲得して生体内に棲みつくことを明らかにすることができました。また、細胞内分子FRS2betaが、超早期のがん幹細胞を取り囲む炎症性の微小環境を作り出すことを見出すことができました。将来、がん幹細胞標的治療による再発転移予防法や、超早期がんの悪性化予防法の確立に少しでも貢献できることがあればとてもありがたいことと存じます。

研究分野のスタッフはじめ国内外の共同研究者の皆さまのお力無くしては、このような成果を得ることができませんでした。がん進展制御研究所や和田学長をはじめとする金沢大学の諸先生方には多大なるご支援を賜りました。心より御礼申し上げます。十全同窓会の先生方におかれましては、今後とも何とぞよろしくご指導ご鞭撻賜りますようお願い申し上げます。

日本動脈硬化学会JAT賞受賞

多田　隼人（平成15年卒業）
金沢大学循環器内科／循環予防医学

この度、日本動脈硬化学会Journal of Atherosclerosis and Thrombosis（JAT）賞を受賞いたしましたのでご報告申し上げます。本賞はJAT誌に掲載された研究論文の中で編集委員による推薦ならびに採点により該当年度における優秀論文を評価するものです。研究の背景として、日本動脈硬化学会において家族性高コレステロール血症（FH）診療ガイドライン2017年版では診断基準の一つであるアキレス腱肥厚がX線で男女ともに9mm以上と定められておりましたが、こちらの基準は特異性は高いものの感度が低いことが問題でありました。そこで今回、国立循環器病研究センターとの共同研究においてFH遺伝学的検査やアキレス腱肥厚のX線検査などを行った合計986例の解析を行い、本症の病原性遺伝子変異を予測する適切なアキレス腱肥厚の値を検討し、本研究の結果を基に、診療ガイドライン2022年版では男性で8.0mm以上、女性では7.5mm以上と改訂されるに至りました。改訂により、診断感度が向上（診断数の増加）することが期待され、本症の早期診断治療により心血管疾患予防に貢献することが期待されると考えます。社会（診療ガイドライン改訂）へ与えたインパクトの大きさが評価されたものと考えますが、引き続き本症の早期診断治療により動脈硬化の予防に努めて参ります。今回の受賞にあたりご指導・ご支援いただきました高村雅之教授をはじめ循環器内科学の先生方、加賀市医療センター内科 川尻剛照先生に深謝申し上げます。

令和４年度金沢大学附属病院 臨床研究優秀論文賞受賞

黒田　梨絵（平成14年卒業）
金沢大学小児科

若林　大志（平成17年卒業）
金沢大学附属病院核医学診療科

この度「高リスク神経芽腫患児に対して大量化学療法、造血幹細胞移植前に^{131}I-MIBG治療を実施する第I/II相臨床試験」というテーマで令和4年度金沢大学附属病院臨床研究優秀論文賞を共同受賞いたしましたので、謹んでご報告申し上げます。

高リスク群神経芽腫は予後不良な疾患ですが、神経芽腫へ特異的に集積しβ線を放出する^{131}I-MIBGを標準治療に組み込むことで治療効果の増強が期待されます。試験計画時は^{131}I-MIBG治療が国内未承認であり、先進医療Bとして臨床試験を実施しました。

初発神経芽腫6例に対しては、大量^{131}I-MIBG治療、大量化学療法、自家移植、再発神経芽腫2例に対しては大量^{131}I-MIBG治療、大量化学療法、KIRリガンド不一致臍帯血移植を実施しました。予後不良とされる再発神経芽腫患児に対しては自家移植ではなく国内で初発難治性高リスク神経芽腫の再発抑制に有用とされているKIRリガンド不一致臍帯血移植（免疫療法）を骨髄レスキューに用いました。通常、KIRリガンド不一致臍帯血移植の前処置には全身放射線照射が採用されていますが、再々発予防、晩期合併症の軽減、QOLの改善を期待し本研究で移植の前処置として大量MIBG治療を用いました。本試験では重篤な副作用は認めず、短期的ではありますが治療後再発は認めませんでした。本報告で大量^{131}I-MIBG治療、大量化学療法、KIRリガンド不一致臍帯血移植が安全に行えることを世界で初めて前向き試験で確認でき、本治療により神経芽腫の予後改善に繋がると期待されます。

本研究に対しご指導いただきました小児科、先端医療開発センター、核医学診療科の先生方、スタッフの皆さまに深謝いたします。今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

令和4年度
金沢大学学長賞受賞

米澤　宏隆（平成25年卒業）
金沢大学整形外科
（現在厚生労働省保険局医療課）

この度、先進予防医学研究科先進予防医学共同専攻（博士課程）修了に際し、金沢大学学長賞をいただきましたのでご報告申し上げます。

この賞は、各博士課程の卒業生のなかから、英語論文やインパクトファクター、学会賞などの業績を総合的に判断し、優秀な成果を上げた者が授与されるものです。私の場合は、学位論文が整形外科の中では評価の高い雑誌に掲載されたことや、科研費（若手、基盤C）を取得できたことをご評価いただきまして、受賞にいたりました。このような素晴らしい賞を受賞できたこと、感謝申し上げます。

私の研究テーマは、「液体窒素処理担癌神経グラフトを用いた新しい末梢神経再建法」というもので、土屋弘行名誉教授が開発された悪性腫瘍切除後の液体窒素処理骨再建法を、神経再建に応用を広げるための基礎実験でした。骨軟部肉腫の広範切除とともに合併切除された神経がもったいないと感じ、液体窒素処理骨再建のように再利用ができないか、というアイデアから始まった研究でした。神経の切除は、患肢の機能損失だけでなく、神経痛の原因にもなるため、一度切除した神経を液体窒素処理で殺細胞化し、再利用することで、よりよい患肢再建につながることが期待されました。そして、動物実験により、良い結果が得られたときは大変に嬉しかったことを覚えております。

今回の受賞にあたりまして、ご指導いただいた土屋名誉教授をはじめ、山本憲男先生、教室の先生方に感謝申し上げます。今後も大学院生で培ったリサーチマインドをもって精進してまいりたいと思います。十全同窓会の先生方におかれましては、引き続きご指導、ご鞭撻のほどを何とぞよろしくお願い申し上げます。

令和４年度
金沢大学学長賞受賞

村井　惇朗（大学院生）
金沢大学整形外科

この度、大学院博士課程修了に際しまして、金沢大学学長賞を受賞しましたことをご報告させていただきます。

整形外科の大学院生活では、母指CM関節症に対する人工関節置換術を用いたより良い治療法の研究と、脂肪由来幹細胞を用いた末梢神経損傷の再生を促進させる基礎研究を行い、この賞は母指CM関節症の治療に対する研究をきっかけに受賞することができました。この研究は金沢大学工学部と共同で行い、合計8肢位の動作における母指のCTデータから3Dの骨モデルをCADソフト上に作製して、より正常の解剖を再建できる人工関節をシュミレーションしました。その結果、理想の人工関節の回転中心は第1中手骨内にあることが判明し、現在一般的に用いられている人工関節は回転中心が大菱形骨の中に位置しており、より母指の正常な運動を再建するためには人工関節の回転中心位置を変える必要がある可能性が得られた研究となります。

この賞を機に3月の金沢大学学位記授与式にも医学博士課程の総代として参加させていただき、医師として元気だけは誰よりも負けないようにと大きな声で返事したところ、式の後に和田隆志学長から「声が大きくて気持ちよかったよ」と仰っていただき、素晴らしい思い出となりました。

今回の受賞にあたり、ご指導いただきました土屋弘行名誉教授をはじめ、多田薫先生、共同で研究してくださった先生方に深く感謝申し上げます。現在は手外科医として診療を行っており、また自分が幼少期よりピアノを演奏していた経験から、北陸に音楽家診療を広められるように尽力しております。十全同窓会の先生方におかれましては、今後ともご指導ご鞭撻のほど何とぞよろしくお願い申し上げます。

24th EFORTcongress 2023
Best Poster Presentation Award
受賞

谷中　　惇（平成27年卒業）
金沢赤十字病院整形外科

この度、令和5年5月にオーストリアのウィーンで開催された24th The European Federation of National Associations of Orthopaedics and Traumatology（EFORT）Congressにおいて、Best Poster Presentation Awardを受賞いたしましたので、謹んでご報告いたします。発表の内容は私の学位研究で、多血小板血漿（PRP）を使用し軟骨分化誘導させた脂肪由来幹細胞（ADSC）をシート化した軟骨分化誘導脂肪由来幹細胞シートが変形性関節症（OA）に及ぼす効果についての研究です。OAは保存加療のみでは対処できず、手術を要する患者も多い疾患です。超高齢化社会の現代では、高齢者に多いOAの患者数も多く、医療経済的観点からも、手術に至らないための予防や修復のための治療が求められています。そのような中、幹細胞を使用したOAに対する再生医療は近年注目を集めています。我々の教室ではADSCを使用したシート化技術を開発しており、OAに対する効果を報告しておりますが、長期の効果としては不十分と言わざるを得ません。過去の報告でPRPを含有した培地でADSCの培養を行うことで軟骨細胞マーカーの発現上昇を認めると報告されておりましたので、この分化誘導と我々のシート化技

術を組み合わせることでOAの軟骨修復へ更なる効果が期待できると考え、本研究に至りました。結果としては、PRPの使用により軟骨細胞マーカーの発現が上昇したADSCをシート化させることができ、軟骨形成細胞シートを作成することができました。この軟骨形成細胞シートは関節内への投与で長期的に関節周囲に生着し、軟骨保護に有効でした。実際の軟骨細胞への分化を確認できていないことや、変性した軟骨への細胞生着が認められていないことが課題であり、今後さらなる検討が必要です。

最後に、今回の受賞にあたり、ご指導をいただきました土屋弘行名誉教授、加畑多文准教授をはじめ教室・同門の先生方にこの場をお借りして感謝申し上げます。

第122回日本皮膚科学会総会 優秀演題賞受賞

伏田奈津美（平成28年卒業）
金沢大学附属病院皮膚科

この度、令和5年6月に開催されました、第122回日本皮膚科学会総会において「当科における全身性エリテマトーデス（SLE）に対するアニフロルマブ投与症例の検討」について発表し、優秀演題賞を受賞いたしましたので、謹んでご報告申し上げます。

アニフロルマブはI型IFN（IFN-1）α受容体のサブユニット1に対するヒト免疫グロブリンG1κモノクローナル抗体で、本邦では既存治療で効果不十分なSLEを適応症として2021年9月に承認されました。我々は2022年1月から2023年2月までに、当科でアニフロルマブを投与したSLE7例を対象とし、投与前後の病勢につき比較しました。投与継続できた6例中5例でSLEDAI-2Kの改善を認め、平均スコア改善率は69%でした。また、皮疹を認めた5例全例でCLASI活動性スコアの改善を認め、平均スコア改善率は91.2%でした。さらに、6例全例でPSLを減量することができました。大多数のSLE患者ではIFN-1シグナルの増加がみられ、さらに、皮膚症状を有するSLE患者では、IFN-1誘導遺伝子の有意な発現亢進が認められています。したがって、アニフロルマブは既存治療で効果不十分なSLE、特に難治性の皮膚症状を有する患者に適していると考えられ、今後ますます皮膚科での需要が高まっていくと考えます。アニフロルマブ投与症例は現在9例まで増加しており、今後も評価を継続していく予定です。

最後に、今回の受賞にあたり、ご指導をいただきました松下貴史教授をはじめ教室の先生方に感謝申し上げます。十全同窓会の先生方におかれましては、今後ともご指導ご鞭撻賜りますようお願い申し上げます。

第3回日本耳鼻咽喉科 免疫アレルギー感染症学会 奨励賞受賞

溝上　晴恵（平成28年卒業）
金沢大学耳鼻咽喉科・頭頸部外科

この度、令和5年4月13～15日に和歌山城ホールで開催されました第3回日本免疫アレルギー感染症学会において、「EBVゲノムが誘導する上咽頭癌のエピゲノム異常」という演題で発表し、奨励賞を受賞いたしましたのでご報告させていただきます。

Epstein-Barrウイルス（EBV）はバーキットリンパ腫や上咽頭癌、一部の胃癌などを引き起こすがんウイルスです。上咽頭癌においては、*LMP1*や*EBNA1*などのウイルス遺伝子が癌遺伝子として作用することが知られていますが、EBVゲノムの宿主ゲノムへの影響についてはまだ明らかになっていません。そこで、次世代シークエンサーを用いてEBVゲノムが作用する宿主ゲノム領域（EBV interacting region, EBVIR）を同定し、誘導されるクロマチン構造異常を解析しました。正常上咽頭上皮では、EBVIRの9割程度がヌクレオソームの凝集したヘテロクロマチンでした。上咽頭癌と比較すると、ヌクレオソームが広がって存在するユークロマチンに変化している領域を認めました。さらにEBVIRが集簇している領域に注目すると、*PLA2G4A*という遺伝子と、そこから6Mb下流の領域が癌では3次元的に近接していました。癌での遺伝子発現上昇とノックダウンでの細胞増殖抑制も認め、EBVゲノムとの相互作用によって、緩んだ宿主クロマチンが上咽頭癌の増殖に寄与していることが示唆されました。今後は臨床検体でも同様のエピゲノム解析を進めていきたいと考えています。

本研究は、国内留学で千葉大学分子腫瘍学教室に在籍している間に行ったものです。ご指導いただきました金田篤志教授、岡部篤史先生、また国内留学の機会を与えてくださった金沢大学耳鼻咽喉科・頭頸部外科の吉崎智一教授、近藤悟先生を始めとした教室員の皆さまに、心より感謝申し上げます。

第12回日本視野画像学会 優秀演題賞受賞

宇田川さち子（平成30年大学院修了）
金沢大学附属病院眼科

この度、第12回日本視野画像学会で優秀演題賞を受賞いたしましたので、ご報告させていただきます。受賞した演題は、「黄斑上膜眼の中心窩無血管領域と視機能との関係：緑内障の有無による影響」です。緑内障は、網膜神経節細胞とその軸索である網膜神経線維が障害され、視野（見える範囲）が障害される疾患です。日本における中途失明原因の第1位であり、国内の緑内障疫学調査（Tajimi Study）では、40歳以上の日本人における緑内障の有病率は 5.0％と報告されています。黄斑上膜は網膜の表面にセロファン状の膜がはり、それによって視力低下や歪視、物が大きく見える（大視症）などが生じます。黄斑上膜は硝子体手術によって視力改善が期待できますが、進行した緑内障を合併した眼では硝子体手術が引き金となり、中心視野障害を悪化させることを以前、当教室から報告しました。今回は、黄斑上膜合併緑内障眼と黄斑上膜眼での変視量（ものが歪んで見えること）と構造的なパラメータとして中心窩無血管領域（foveal avascular zone: FAZ）の関係を検討しました。結果としては、FAZは黄斑上膜の重症度と変視量に関連し、緑内障の有無はFAZ面積と独立して黄斑上膜の変視量に影響しており、黄斑上膜合併緑内障眼では黄斑上膜眼と比較して、変視を自覚しにくいことがわかりました。今後も、黄斑上膜合併緑内障眼の手術適応の判断、術後視野の長期経過などを含めて、臨床に還元できるよう研究をさらに発展させてまいりたいと思います。研究のご指導をいただきました杉山和久教授、東出朋巳准教授、共同研究者の先生方に心より感謝申し上げます。

第21回高安賞

高安賞は平成15年、本学昭和39年卒業の臼井溢先生のご篤志により設けられた賞で、優秀な学位論文を発表した博士課程修了者に贈られる。選考は、第一次審査会（主査および副査）と専攻長等から構成される選考委員会の2段階で行われ、博士課程委員会及び先進予防医学研究科会議の議を経て決定される。

令和5年度受賞者には、次の3名が選ばれた。

最優秀論文賞

齋藤　健吾（令和４年度大学院修了）
脳神経科学

Astrogenesis by FGF signaling induces folding of the cerebral cortex
（FGFシグナルによるアストロサイト産生が大脳皮質の脳回形成を引き起こす）
Science Advances　2022年3月掲載

優秀論文賞

HEIN KO OO（令和４年度大学院修了）
内分泌・包括代謝学

Selenoprotein P-mediated reductive stress impairs cold-induced thermogenesis in brown fat
（セレノプロテインPによる還元ストレスは褐色脂肪組織における寒冷誘導熱産生を障害する）
Cell Reports 2022年3月掲載

優秀論文賞

辻　　紀章（平成26年卒業）
血液内科学

Frequent HLA-DR loss on hematopoietic stem progenitor cells in patients with cyclosporine-dependent aplastic anemia carrying HLA-DR15
（HLA-DR15陽性のシクロスポリン依存性再生不良性貧血患者の造血幹前駆細胞における高頻度なHLA-DR欠失）
Leukemia 2022年6月掲載

令和５年７月1日（土）開催の金沢大学医学部十全同窓会総会で堀修医薬保健学総合研究域長から各受賞者に賞状と記念盾および副賞賞金が授与された。

（絹谷　清剛：記）

第19回 黒川良安賞・スロイス賞

黒川良安賞受賞

千葉　環樹（令和４年卒業）
増田　涼香（令和４年卒業）
安藤　　蘭（令和４年卒業）

スロイス賞受賞

窪田　剛大（3年次修了）
吉田　侑生（3年次修了）
川口　詩織（3年次修了）

医学類の成績優秀学生を顕彰する黒川良安賞およびスロイス賞の授与が行われました。今回で19回目を迎えました。なお、両賞は医王保護者の会の支援を受けております。

黒川良安賞は令和４年卒業生の成績優秀者上位3名に授与されました。今回は、令和5年3月22日（水）に第3、4講義室で行われた学位記授与式の席上、杉山和久医学類長から黒川賞の賞状、副賞が千葉環樹さん、増田涼香さん、安藤蘭さんの3名に渡されました。

また、スロイス賞は、医学類3年次を修了した学生のうちから3名の成績優秀者が受賞しました。7月8日（土）十全講堂で行われた「医王保護者の会」の総会時に、土山寿志会長より窪田剛大さん、吉田侑生さん、川口詩織さんに賞状、副賞が渡されました。受賞した皆さま、誠におめでとうございます。これからも頑張ってください。

（杉山　和久：記）

第4回鈴木大拙―西田幾多郎記念金沢大学国際賞授賞式および記念講演会

日時／令和5年8月9日（水）
場所／ホテル日航金沢

令和5年8月9日、第4回鈴木大拙―西田幾多郎記念金沢大学国際賞授賞式および記念講演会がホテル日航金沢において開催されました。今回は対面の祝賀会も行われ、有意義な交流の場となりました。

本賞は、第四高等中学校に学んだ鈴木大拙と西田幾多郎にちなみ、本学医学部ご出身である臼井溢先生（昭和39年卒業）のご篤志を原資として平成29年6月に創設されたものです。その趣旨は、哲学・思想・宗教を中心とする分野で国際的に卓越した業績を挙げた研究者を顕彰し、当該分野の研究の一層の進展を促すとともに、次代を担う若手研究者に対して大きな学問的刺激を与え、国際貢献と学術研究のさらなる発展に資することにあります。

第4回受賞者にはRichard M. Jaffe（リチャード・M・ジャフィ）デューク大学教授・同大学アジア太平洋研究所長が選ばれました。ジャフィ教授は、長年にわたり鈴木大拙を中心とした日本の仏教思想家を幅広い知識と綿密な調査にもとづいて研究して来られました。

授賞式では、和田隆志学長の開式の辞に続き、臼井先生からご挨拶があり、日本文化の発信・国際交流推進に向けた構想について説明がありました。和田学長からジャフィ教授に盾、副賞、輪島塗の記念品が贈呈されると、ジャフィ教授から35年前の来日以来数え切れない人たちの親切と協力があった旨の回顧と謝辞が述べられ、選考委員会委員の先生方の紹介と祝電の披露をもって閉式となりました。

続いて記念講演会となり、ジャフィ教授から「マンハッタンに広がるインドラの網―鈴木大拙のコロンビア大学セミナー講義 1952–1953」のタイトルで1時間半にわたるお話がありました。鈴木大拙が第二次世界大戦後の米国で多くの知識人と交流し影響を与えたこと、特にコロンビア大学で鈴木大拙が行った講義が宗教的・精神的探究への関心を抱く多くの芸術家、学者、精神分析家、作家を惹きつけたことが歴史的なスライド資料とともに紹介されました。

なお、本賞については本学のホームページ（URL: https://award.w3.kanazawa-u.ac.jp/）に詳しく紹介されています。

（会報副編集委員長　横山　　茂：記）

学 会 報 告

令和5年度金沢大学十全医学会学術集会開催報告

日時／2023年6月20日（火）　場所／十全講堂

2023年6月20日、金沢大学十全講堂にて、十全医学賞授賞式および記念講演に続き、2023年度十全医学会学術集会を開催しました。本年度のテーマは「細胞ストレス」です。会場となった十全講堂には279名が参加し、学内外から3名のトップランナー研究者による講演が行われました。

1．金沢大学がん進展制御研究所がん・老化生物学分野 城村由和教授「先進的な健康寿命延伸医療の実現に向けた細胞老化制御法の創出」：加齢に起因するDNA損傷などのストレス応答として老化した細胞が、細胞老化関連分泌（SASP）因子の分泌を介して、慢性炎症、臓器機能不全をもたらす病態が解明されつつあります。城村教授はマウス生体内で老化細胞を可視化する系を確立しました。グルタミン代謝酵素GLS1が老化細胞の生存維持に必須であり、リソソーム膜損傷によるグルタミン代謝の亢進が老化細胞の脆弱性の分子基盤であることを見出し、GLS1阻害剤が老化細胞を除去することで種々の加齢性疾患に有効であることを示しました。一方で、発生段階や急性組織障害時に誘導される老化細胞は組織構築・再建に重要な役割を果たすこと、再生困難な非増殖性細胞でも老化が生じていることが、老化細胞除去療法のピットフォールとなることから、partial reprogrammingによる細胞若返りの研究を進めておられるようです。

2．金沢大学がん進展制御研究所／ナノ生命科学研究所遺伝子・染色体構築研究分野 平尾敦教授「造血幹細胞恒常性維持機構とその破綻」：骨髄に存在する造血幹細胞は、自己複製能と各種血液細胞を産生するための多分化能を兼ね備え、造血組織の恒常性に寄与しています。平尾教授は、造血幹細胞の未分化性が、タンパク合成のマスター因子mTOR抑制、飢餓で活性化される転写因子FOXO活性化、転写因子TFEBによるオートファジー・リソソーム経路の活性化により維持されていることを見出しました。これらの知見を背景に、食による造血幹細胞制御の研究が進行中です。事実、カロリー制限、間欠的絶食は造血幹細胞の静止状態を誘導し、老化表現型を抑制する一方、食事性肥満は造血幹細胞の再生能力を低下させます。平尾教授は、Spred1が腸内細菌叢の変化を介して、高脂肪食により促進される幹細胞の異常自己複製と骨髄増殖性疾患から保護することを見出しました。

3．東北大学東北メディカル・メガバンク機構長 山本雅之教授「酸化ストレス応答の分子基盤：マウス、ヒトから宇宙の生物学へ」：山本教授は、環境ストレスに対して、生体防御遺伝子群の発現を制御する転写因子NRF2、および酸化ストレスを感知するセンサーKEAP1を発見しました。NRF2はKEAP1に捕捉され、ユビキチン化されて、プロテアソームによる速やかなタンパク質分解を受けることで、非ストレス状態での細胞内のNRF2発現レベルは低く保たれますが、細胞が環境毒性物質や酸化ストレスに曝されると、KEAP1の機能が障害され、NRF2が活性化します。KEAP1-NRF2系の失調は多くの病態の発症・重篤化に関連する一方、NRF2活性化は酸化ストレス軽減、抗炎症、糖代謝改善への応用が期待されています。講演では、東北メディカル・メガバンク機構の15万人規模のバイオバンクや日本人多層オミックス参照パネル（jMorp）を通じた疾患バイオマーカーの発見や個別化予防早期診断への期待が紹介されました。さらにJAXAとの共同研究を実現し、国際宇宙ステーション（ISS）日本実験棟「きぼう」でNRF2欠損マウスを用いて、NRF2が微小重力環境と宇宙放射線という宇宙ストレスにも応答することを証明しました。基礎研究→ヒトコホート研究→宇宙生物学に展開するスケールの大きな講演に圧倒されました。

最新の研究成果が紹介され、活発な議論を通じて、本学の医学類生、医師、研究者、すべてのレイヤーの学術・研究の発展に大きなインパクトを与える充実した学術集会となりました。このような質の高い学術集会が十全医学会の意義を高め、多くの会員の支持につながることを期待します。本学術集会の開催に向けてご尽力いただいた十全医学会集会担当理事である和田泰三教授、三枝理博教授、山本靖彦教授、倉知慎教授、そして関係者各位、学術集会に参加していただいた会員の皆さま方に心より感謝申し上げます。

（十全医学会会長　篁　　俊成：記）

学 会 報 告

令和5年度金沢大学十全学術交流会開催報告

日時／令和5年7月22日（土）　場所／KKRホテル金沢

令和5年7月22日（土）に金沢大学十全学術交流会を開催いたしました。新型コロナウイルス感染症が5類に移行したことを受けて、4年振りに対面形式のみで実施しました。今年は県外および学部学生を含めて95名の参加者を得て交流会を盛会裏に終えることができました。

本交流会は、金沢大学医学系に深く関わりがあり、各地の大学や研究所などでご活躍の先生方（主に十全医学会評議員）の情報交換を目的として2019年に始まりました。今年は対面形式で再開するにあたり3つの試みを取り入れました。1点目は、十全医学会と十全同窓会が共同で本交流会を開催する形とし、会の名称を「金沢大学十全学術交流会」といたしました。本交流会にご参加いただくほとんどの方が十全同窓会員でもあり、本交流会を通じた学術活動の展開は十全同窓会の発展にもつながると考えられるためです。2点目は、遠方からの参加者に金沢の風情を楽しみつつ交流していただけるように、金沢城公園に面したKKRホテル金沢で開催しました。3点目は、研究医（physician scientist）を目指す医学生に発表と交流の機会を拡大することを目的として、金沢大学MRT（メディカルリサーチトレーニング）プログラム履修中の医学部学生にも参加を呼びかけました。過去の交流会で十全同窓会OB・OGの先生方から頂戴する金沢時代の想い出や後輩へのメッセージや、研究医としてのキャリアパスが、研究に関心を抱く若手に対して良い刺激になると思われたためです。

交流会では最初にMRTプログラムの医学類５年生新井雄大さんが「ボツリヌス菌の感染防御に寄与するヒト腸内細菌の分離・同定」について発表し，次いで近藤悟先生（金沢大学附属病院耳鼻咽喉科・頭頸部外科講師）から「ウイルスによる頭頸部癌発癌・転移機構の解明」についての発表がありました。続いて特別講演として土原一哉先生（国立がんセンター先端医療開発センター／橋渡し研究推進センター副センター長）が「アカデミア発の革新的がん治療開発のための基盤・拠点構築」について講演され、最後に岡田尚巳先生（東京大学医科学研究所遺伝子・細胞治療センターセンター長）から「AAVベクターを用いた筋ジストロフィーに対する遺伝子細胞治療」について、ご講演していただきました。

引き続き催された懇親会では、中村裕之先生（同窓会理事長）、和田隆志先生（金沢大学長）、山本健先生（同窓会会長）のご挨拶の後、堀修先生（医薬保健学域長）のご発声で乾杯し、学生を交えて盛んな意見交換が行われました。ご参加いただきました先生方並びにご支援をいただきました十全同窓会に厚く御礼を申し上げます。

（倉知　　慎：記）

令和5年度金沢大学関連病院長会議

日時／令和5年7月1日（土）　場所／金沢大学附属病院4階宝ホール

金沢大学関連病院長会議は令和2年度はコロナ禍のため、開催が中止となり、書面付議で行われました。令和3年度は6月26日（土）に県内の理事の先生方に出席していただき、その他の先生方はWebで参加という形で開催しました。令和4年度は石川県内の病院長の先生方には金沢大学附属病院の宝ホールに来ていただき対面で、富山県、福井県の院長先生方はWebでの参加となりました。令和5年度は7月1日（土）に久しぶりに完全対面で実施することができました。

会員数は令和4年度は85（富山県21、石川県47、福井県13、その他4）であり、今回新たな入会の報告はありませんでした。

会長の岡田俊英 石川県立中央病院長が開会の挨拶をされ、薮下和久 高岡市民病院長が議長に選出され、会計理事の荒木一郎 浅ノ川総合病院長から令和4年度の事業報告、会計報告、令和5年度事業計画、令和5年度収支予算（案）が説明され、承認されました。

その後、役員の異動が報告されました。新理事に辻宏和 黒部市民病院長、笠原善郎 福井県済生会病院長、小松和人 福井赤十字病院長が就任されました。

金沢大学関連病院長会議会則の改正が行われ、医局長を参与から除く、中央診療施設等の長も参与から除く、各会議への代理出席を可とする規定を明記することが承認されました。

次いで各ブロック会議から報告がなされました。各ブロックとも医師派遣の要望と医師の働き方改革への大学の対応について質問がありました。

続いて意見交換会が行われました。附属病院長の蒲田からは、本年末に新中央診療棟が完成し、手術室が5部屋増えて20室になり、来年4月より運用を開始することを説明いたしました。また、吉崎智一副病院長からは働き方改革への対応状況等について説明がありました。関連病院長からも働き方改革への対応を大学と協力してやって行きたいという意見が出されました。16時にすべて議題が終了し、閉会となりました。

（蒲田　敏文：記）

御遺骨返還式・合同慰霊祭

日時／令和5年6月17日（土）
場所／医学部十全講堂

令和5年度は、新型コロナウィルス感染症の感染拡大状況を鑑み、文部科学大臣感謝状は伝達のみとし、献体者御遺骨返還式及び合同慰霊祭は、感染防止に最大限配慮をする形で執り行いました。

献体者御遺骨返還式は、午前10時から、ご遺族の皆さま、しらゆり会役員の皆さまにお越しいただき、杉山和久医学類長、医学系教職員、学生代表が出席して始まりました。名誉会員35名のご冥福を祈って黙祷をささげた後、祭主の杉山和久医学類長が、追悼の言葉を述べられました。つづいて杉山和久医学類長からご遺骨がご遺族おひとりおひとりに返還されました。最後に学生を代表して清水梓紀さん（3年生代表）が感謝の言葉を申し上げ、解剖学教育と献体業務の担当代表として機能解剖学教授尾﨑紀之がお礼の言葉を申し述べ、御遺骨返還式は終了しました。

第119回合同慰霊祭は午後1時に始まりました。祭壇には、令和3年と令和4年に、正常解剖と病理解剖に御体を捧げられた139名のご芳名を記した聖額が立てられ、ご遺族としらゆり会役員の皆さまのご臨席を仰ぎ、杉山和久医学類長、蒲田敏文附属病院病院長、医学系と附属病院の教職員、学生代表が参列しました。黙祷の後、杉山和久医学類長が追悼の言葉を述べられ、出席者全員が献花をしました。最後に蒲田敏文病院長が謝辞を述べられ、慰霊祭は終了しました。

7月3日（月）に、金沢大学医学部卯辰山墓地で献体者盂蘭盆会法要が営まれました。杉山和久医学類長をはじめとする医学系教職員が参列しました。覚林寺ご住職のご読経を賜り、参列者一同で献体者のご冥福をお祈りしました。墓地法要終了後、十全同窓会が平成14年10月に修造してくださったホルトルマン（金沢医学所教師）愛児（明治9年～10年歿）の墓碑にも奉拝しました。

（尾﨑　紀之：記）

論　　説

サピエンス進化医学研究センターについて

サピエンス進化医学研究センター センター長
医学系脳神経医学分野教授　河﨑　洋志

はじめに

十全同窓会の皆さまには日頃より大変お世話になり改めて御礼申し上げます。2023年5月1日に金沢大学医薬保健研究域附属サピエンス進化医学研究センターが新設されましたので概略をご紹介させていただきます。本センターは古代人ゲノム研究・データサイエンス・医学生命科学研究を統合する新しい学術分野の創生と発展を通じて、人類進化プロセスや疾患病態の解明と革新的な医療の実現を目指しています。

経緯とコンセプト

約2年前に当時の和田隆志理事（現学長）より、考古学と現代医学を結びつけて新しい研究領域として立ち上げると面白いのではないかとのお話しをいただきました。金沢大学の研究支援に超然プロジェクトがありますが、その支援を受けていた古代文明研究と脳進化研究を結びつけてはどうかとのご提案でした。当初は難しいのではないかとも感じたのですが、多くの先生方と議論を重ねるうちに、古代人から現代人に至る進化の分子メカニズム、および進化と疾患病態との関連の研究は今後重要になるのではないかとの話になりました。

古代人研究の現状としては、ネアンデルタール人や縄文人などの古代人のサンプルからDNAを抽出し遺伝配列を解析することが可能となってきています。実際にSvante Pääbo博士はネアンデルタール人の遺伝配列解析の業績により、2022年にノーベル生理学・医学賞を受賞されました。また金沢大学では縄文人や弥生人の遺伝配列解析が行われ、日本人の祖先について先駆的な研究成果が報告されています。また医学系では脳神経系の発生や進化の分子機構を報告してきました。そこでこれらを結びつけ、古代人から現代人に至る遺伝子変化の機能的意義、およびそれらの異常と疾患との関連を解明するサピエンス進化医学研究センターが設置されることとなりました。

センターには古代人ゲノム解析部門、古代人解析技術開発部門、生体解析技術開発部門および進化疾患メカニズム部門の4部門を設置し、古代文明・文化資源学研究所、疾患モデル総合研究センター、ナノ生命科学研究所および医学系から研究者が参加しています。古代人ゲノム解析部門では古代人サンプルから抽出したゲノム配列の解析を、古代人解析技術開発部門ではゲノム以外のエピゲノムやプロテオーム等の解析技術やバイオインフォマティクス技術の開発を、生体解析技術開発部門では遺伝子改変動物作成技術やオルガノイド作成技術の開発を、進化疾患メカニズム部門では脳や代謝など様々な身体変化および疾患と進化の関連を遺伝子レベルから解析します。

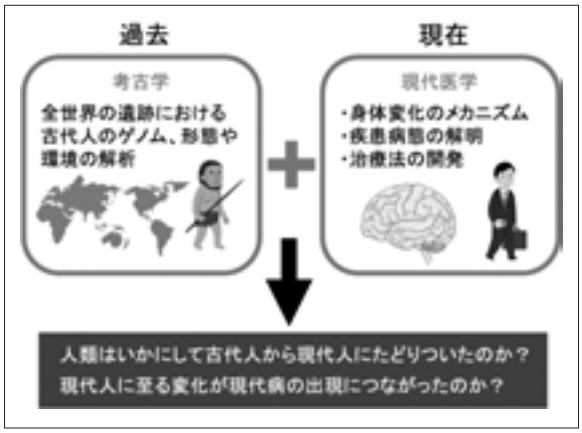
5月23日には宝町キャンパス医学部記念館で「サピエンス進化医学研究センター・キックオフシンポジウム」を開催しました。シンポジウムでは、まず冒頭に和田学長より開会のご挨拶を頂き、本センターの金沢大学における使命などをお話しいただきました。続いて中村慎一理事から新しい学術融合研究への期待を込めたご挨拶があり、私から本センターのコンセプトについてご説明申し上げました。その後に学外から産業技術総合研究所の石谷孔司先生、ヘルシンキ大学の難波隆志先生、学内より４名の先生方に研究紹介をしていただき、議論を行いました。最後に堀修医薬保健研究域長に閉会のご挨拶をいただきました。オンサイトで開催しましたが、学内外よりの研究者や学生など約100名がご参加くださり新しい研究分野に対する活発な情報交換が行われ、新たな交流が生まれていました。

今後の展開

研究面では、学内の古代人ゲノム・データサイエンス・医学生命科学などの専門知識を有する研究者が協力し、進化医学のさまざまな側面を包括的に研究していきます。さらに遺伝子多型、遺伝要因と環境要因との相互作用、疾病リスクの予測などについて、データ解析や数理科学などを活用していきます。海外の有力研究拠点であるヘルシンキ大学、コペンハーゲン大学との連携を促進し、基礎研究から臨床応用に展開することを通じて、進化医学の知見を現代の医療に活かすことを目指していきます。

研究活動に加えて、進化医学に関する教育プログラムも提供していきたいと考えています。学部生、大学院生や医学研究者を対象としたセミナーなどを通じて進化医学の基礎知識や最新の研究成果を学ぶ機会を提供するとともに、研究成果を広く社会に伝えていく予定です。金沢発のオリジナルな研究成果を切り口として、健康と疾病を理解し、より良い未来の医療に貢献することを目指してまいりますので、十全同窓会の皆さまには今後ともご支援とご鞭撻を賜りますよう何とぞよろしくお願い申し上げます。

末筆となりますが、執筆の機会を賜りました十全同窓会会報編集委員長の絹谷清剛教授に深謝申し上げますとともに、十全同窓会の皆さまのご健勝とご多幸をお祈り申し上げます。



金沢から世界へ発信

脳内幸せホルモンが視えた

～オキシトシンを生きた脳内で捉える蛍光センサーの開発～

金沢大学医薬保健研究域医学系組織細胞学教授
西山　正章

概要

オキシトシンは、幸せホルモンとも称される脳内物質であり、われわれの豊かな感情や心身の健康において重要な役割を果たしている。しかしながら、生きた動物の脳内において、オキシトシンを感度よく捉えることは既存の手法では困難であり、オキシトシンが脳内でどのように作用しているかは、未解明のままである。

最近、われわれは高感度な蛍光センサーを用いて、生きた動物の脳内からオキシトシン動態を計測する手法を開発した。これにより、脳内のオキシトシンを介した情報処理機構の基本的な理解が進むとともに、難治性の精神神経疾患の病態解明に新たな展開が期待される。本研究の成果は、2022年9月に米国の科学誌「Nature Methods」に掲載された。

研究の背景

オキシトシンは幸せホルモンとも呼ばれる神経ペプチドであり、多様な生体機能制御に関与していることが知られている。“幸せホルモン”という名前が示唆するように、オキシトシンは脳内で分泌されると幸福感や愛情を引き起こすとされるほか、不安やストレスの軽減、食欲や代謝の調整など、われわれの日常生活において重要な役割を果たしている。また、オキシトシンの異常は、自閉スペクトラム症や統合失調症など、難治性の精神神経疾患との関連が報告されており、治療法開発の鍵として注目を浴びている。しかしながら、既存の手法では生きた動物の脳内からオキシトシンを直接測定することが難しく、「オキシトシンが脳内でいつ、どこで、どのように作用しているか」という基本的な問題は解決されていなかった。そのため、生きた動物の脳内からオキシトシンを直接測定する新しい技術の開発が強く求められていた。

研究の内容

われわれは培養細胞を用いたスクリーニングにより、超高感度な蛍光オキシトシンセンサーであるMTRIA$_{OT}$の開発に成功し、このツールを生きたマウスの脳に適用した。そして、さまざまな実験条件下で脳内のオキシトシン応答をリアルタイムで計測することに成功した。

まず、細胞外のオキシトシンが結合することにより蛍光強度が大きく変化する蛍光センサーの開発を行った。センサーのデザインには、オキシトシンと結合する細胞膜タンパク質であるオキシトシン受容体と緑色蛍光タンパク質を組み合わせたキメラタンパク質を採用した。このキメラタンパク質センサーに順次変異を加えていくことで、最終的にはオキシトシンに対して最大約8倍の蛍光強度変化を示す超高感度蛍光オキシトシンセンサーMTRIA$_{OT}$を開発することに成功した。

その後、MTRIA$_{OT}$をマウスの脳に導入し、さまざまな実験条件下で脳内のオキシトシン動態を計測した。この計測により、薬物投与や光刺激によって人為的に誘導された脳内オキシトシン上昇だけでなく、さまざまな外部刺激に応答する内因性のオキシトシン濃度制御も観測された。今回の計測結果からは、刺激の種類に応じて秒単位、分単位、時間単位などの異なる時間スケールで脳内のオキシトシン濃度が変動しているという予想外のシナリオが明らかになった。

本研究成果の意義

今回の超高感度蛍光オキシトシンセンサーMTRIA$_{OT}$の開発により、生きた動物の脳内からオキシトシン濃度の変動をリアルタイムで計測することが可能になった。本研究では限られた実験条件下で脳内オキシトシン動態の計測を行ったが、オキシトシンとの関連が示唆される生理機能や病態の多くが未解明のままである。今後、この手法は広範な研究分野に応用されることが期待される。特に、オキシトシンは自閉スペクトラム症や統合失調症などの難治性疾患の治療において重要な鍵とされており、このツールの活用により病態の解明や治療薬の開発が大きく前進することが期待される。さらに、オキシトシンは内耳や眼などの感覚器官、腎臓などの末梢組織でも重要な機能を果たしていると考えられており、脳以外の臓器間の相互作用シグナル研究にも大いに貢献する可能性がある。

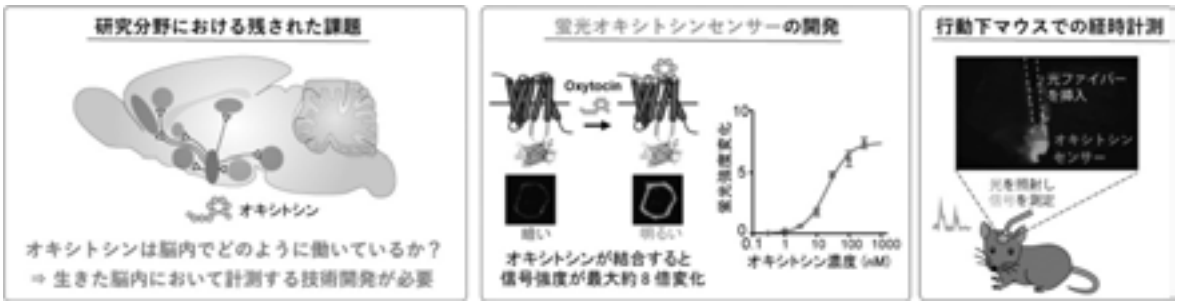


図　本研究の概要
研究分野における課題（左）と本研究におけるアプローチ（中央、右）を示している。本研究では、オキシトシンが脳内でどのように働いているかを明らかにすることを目指し、生きた動物の脳内においてオキシトシン動態を経時的に計測できる新規技術を開発した。

病院紹介

白山石川医療企業団
公立つるぎ病院

当院の歩み

当院は、昭和15年6月、保証責任石川県信用販売購買利用組合連合会により、旧能美郡根上町に開院した「加賀病院（現在：能美市立病院）」の姉妹病院として、旧鶴来町（現在：白山市鶴来地域）に「加賀東病院」として開院しました。以降現在に至るまで、鶴来地域から白山ろく地域における中核病院としての役割を担っています。当院の歩みにおいて最も大きな出来事は平成12年3月の新築移転です。医学・医術が急速に進歩し多様化する中で、当時の病院設備では床面積が狭隘な状態であり、増大していく医療需要に適切に対応していくために計画、実行されました。その後平成20年には公立松任石川中央病院、吉野谷診療所、中宮診療所、白峰診療所とともに「白山石川医療企業団」（構成団体：白山市、野々市市、川北町）を組織し現在に至っています。

当院の現状とこれから

当院は現在、病床数は152床（急性期一般病棟45床、地域包括ケア病棟54床、回復期リハビリ病棟53床）、届け出診療科は18科になります。入院対象はサブアキュート、ポストアキュート、回復期が主であり、高齢者が多いことからいずれの病棟においても各種リハビリテーションを積極的に行っています。山間部診療所は白山ろく総合診療センターとして、内科、整形外科、眼科、皮膚科等の診療を行っています。加えて在宅療養支援センターを開設し、訪問診療、ショートステイつるぎ（21床）の運営、通所リハビリテーション、訪問リハビリテーション、居宅介護支援事業等を行い、さらに白山市からの委託を受け、病院内に地域包括支援センター鶴来を設置し、地域の高齢者や高齢者を支える方の総合相談窓口としての機能や、高齢者の権利擁護などの役割を担っています。外来においては金沢大学各医局の多大なご協力、ご支援をいただき、小児から超高齢者まで問題なく診療できるような体制が組めています。また、コロナ禍において発熱外来を設置し、現在もその対応にあたっています。

しかし、当地域における人口減少、高齢化の波は予想以上に早く押し寄せ、65歳以上人口までもすでに減少し始めており、これに医師不足も相まって経営的には非常に厳しい状況が続いています。このような状況を打破すべく同じく白山石川医療企業団医療施設である公立松任石川中央病院との間で機能分化と連携強化、そして経営面での統合を進めており、今後も引き続きへき地医療に貢献できるよう取り組んでいるところです。

今年5月、白山手取川ジオパークがユネスコ世界ジオパークに認定されました。「山―川―海そして雪　いのちを育む水の旅」をテーマに、ジオパークを「山と雪」「川と峡谷」「海と扇状地」の３エリアに分けて、それぞれの魅力が世界中に発信されています。当院はまさにこのジオパークの扇の要、「山と雪」「川と峡谷」にお住いの方々のいのちをお守りする立場にありますが、これも金沢大学十全同窓会の皆さま方のご支援なくして到底成し遂げられるものではありません。今後ともご指導ご鞭撻のほど何とぞよろしくお願い申し上げます。

（病院長　谷　　卓：記）

概要

白山石川医療企業団　公立つるぎ病院

所在地	石川県白山市鶴来水戸町ノ１番地
病院長	谷　　卓
病床数	52床（急性期一般45床、地域包括ケア54床、回復期リハビリ53床）
診療科数	18

沿革

昭和15年6月	保証責任石川県信用販売購買利用組合連合会により旧鶴来町に「加賀東病院」として開院
昭和31年7月	鶴来地方国保団体連合会「鶴来病院」に改称
昭和48年4月	鶴来地方医療施設組合「公立鶴来総合病院」に改称
昭和52年3月	へき地中核病院（現在：へき地医療拠点病院）の指定を受ける
平成12年3月	「公立つるぎ病院」と改称し、現在地に移転新築、開院
平成15年4月	へき地医療拠点病院の指定を受ける
平成17年2月	市町村合併（白山市誕生）に伴い白山石川医療施設組合に加入
平成20年4月	地方公営企業法全適により「白山石川医療企業団公立つるぎ病院」に改称 吉野谷診療所及び中宮診療所並びに白峰診療所が企業団に加わる
平成29年4月	白山市地域包括支援センター鶴来を開設
平成30年4月	ショートステイつるぎ事業開始

福井県立病院

当院の歩み

福井県立病院は昭和25年4月、日本医療団の解散に伴い福井市四ツ井の平岡山にそれまでの福井中央病院を県に移管する形で、医師14名、看護師24名を含む職員数74名、病床数100床の規模で設立され、同年に隣接して設立された県立精神病院とともに県の基幹病院として医療にあたってきました。設立50年にあたる2000年4月に両院の組織統合を行い、精神科病床400床を含む1083床の福井県立病院として再整備されました。その後スリム化を図り、病床数800床で2021年のコロナ禍を迎えました。感染初期の2021年3月に回復期リハビリテーション病棟50床を削減し感染拡大に備え、重症例の増加については2021年9月にさらに一般病床46床を休床して対応しました。現在の許可病床数は一般551床、結核6床、第一および第2感染症4床、精神198床、合計759床で、中央医療センター、陽子線がん治療センター、がん医療センター、救急救命センター、母子医療センター、こころの医療センターおよび健康診断センターの7センターで構成されています。

当院の現状

この3年におよぶコロナ対応の中で一般病床46床を、中等症32床、HCU12床のコロナ感染症専用病棟として再整備しました。HCUは通常時は一般患者用として使い、感染拡大時にはコロナ患者専用として使用する”スイッチHCU”としての運用を想定しています。また平常時には院内各部署で通常の看護業務を行い、感染拡大時には感染症病棟での勤務を行う看護師をsubICN（Infection Contorol Nurse）として過員配置も行いました。2004年新病院の開院後20年を迎える令和6年には、開院当時120名収容として設計された医局を増築再整備し、200名の医局員全てが集える医局の整備を行います。また本棟では他施設に比較して遅れていた”患者総合支援センター”の新設、レストランおよびフードコーナーの整備、さらに長く期待されていた院内コンビニ設置の工事が開始されています。さらに精神科病棟では、急性期合併症症例への対応のためにさらなる高機能化病床を目指した再変と改築工事も開始されています。

今後の課題

新規入院患者については、コロナ禍1年目17.7％、2年目10.8％、3年目7.5％の減少がありました。2023年度も残念ながら7月時点で6.8％減の状態で、このコロナ禍を通じて大きく変わった患者受診動向への対応が問題です。当院は突発的な感染症拡大に常に備えながら、一般臨床の他に、救命救急医療、周産期医療、僻地医療支援などの様々な政策医療も担当しています。さらに臨床研修指定病院としての若手医師の教育、地域医療構想における役割分担など他施設との調整など課題は多く、現在大きな問題となっている医師の働き方改革は現時点では対応可能ですが、突発的案件が発生すれば達成も難しくなる現状でもあります。多くの課題の山積はどの病院でも同じですが、当院も十全同窓会の皆さまのお力をお借りしながら乗り切っていきたいと考えております。

（病院長　吉川　　淳：記）

概要

福井県立病院

所在地　福井市四ツ井2－8－1

病院長　吉川　　淳

病床数　759床
（一般551床、結核6床、第一および第二感染症4床、精神198床）

診療科数　26

沿革

昭和25年4月	福井県立病院・福井県立精神病院　創立
昭和58年3月	救命救急センター　開設
平成10年1月	災害拠点病院に指定
平成12年4月	福井県立病院と福井県立精神病院を組織統合
平成15年8月	地域がん診療拠点病院 指定
平成16年5月	新病院本棟　開院
	第１種感染症指定医療機関に指定
	総合周産期母子医療センターに指定
平成19年6月	地域医療支援病院として承認
平成21年2月	がん医療センター　開設
平成23年3月	陽子線がん治療センター　開設
平均28年4月	放射線治療棟　開設
	脳心臓血管センター　開設
	緩和ケアセンター　開設
平成30年1月	精神科救急・合併症病棟　開設
令和３年4月	遺伝外来、がんゲノム外来　新設
令和３年5月	ドクターヘリ運航　開始

教室だより

法医学

人員の構成と実務・教育

平成27年発行の十全同窓会会報第161号に、教室便りが掲載されて以来、丸8年振りの教室紹介となります。現在は教員4名（教授、助教2、特任助教）、技官1名、事務補佐員1名、大学院生1名の計7名からなります。前回の構成と異なるのは、医学博士課程大学院生が含まれている点と、MRTプログラムを利用し法医学をより深く学ぼうとする学部学生が、学年毎にほぼ満遍なく5名所属していることです。また特記すべきは、大学院生が社会人大学院生で歯科医師であることから、研究・教育内容も部分的に進化を遂げようとしている点です。令和4年9月福岡歯科大学から赴任した助教は、形態学で培った基礎研究能力を歯科法医実務へと軸足を移し、大学歯学部が存在しない石川県で、口腔内カメラとデンタルX線というシンプルな技術の組み合わせを用いて、金沢大学法医学講座における異同識別に関する鑑定業務第一例目を、既にこなしました。大学院生も日本法医学会での発表で期待に応え、共に歯科法医学の普及に務めています。

研究と人材育成

文部科学省大学院プログラムである基礎研究医養成活性化プログラム（通称：医歯工法プロ）を通して、児童虐待をテーマに法医学の予防医学的側面を推し進める機会を得ました。基礎・臨床を問わず各講座の皆さまのご理解に支えられつつ、令和4年2月から赴任した特任助教の働きも大きく順調に進んでいます。研究面では従来からのヒト血管壁組織脆弱性の解析に加えて、近赤外線反射光の可視化を、児童相談所における新旧混在する皮下出血の検出への応用に目論見ます。他方法医実務の一環として、求めに応じるかたちで、法廷での証言を不定期に行いますが、その際、使用する画像にサイエンスイラストレーションの技術が有効であることが分かり、応用編として患者さんや遺族への説明に活用することを考えています。心的負担の少ない画像を仕上げる際にも、医学知識が必須であることを考えると、医師以外の人材を対象とした医学教育が必須です。前回の教室便りで「医師のマンパワー不足を補う形で、大学教育で死因究明学が講座化する等して、医師以外の専門家を養成する方向が模索され」と宣言した事に対し、令和2年4月1日施行の死因究明等推進基本法の理念を貫き、その点では有言実行できたかと存じます。結果「石川県下の新しい死因究明・身元調査体制を整えるための助けとなること」という中期目標がいくらかでも達成したかと自負しております。

法医学教室の過去・未来

本文執筆から発行までの間に大正12年9月1日に発生した関東大震災から丁度百年が経過、即ち、翌年に東京から初代教授古畑種基先生が当法医学講座を開講してから来年が丸百年ということになります。来年迎える開講百年にあたり、教室の源流について触れたいと思います。書物には「法医学は、明治十二年石川県甲種医学校発足から同二十年八月第四高等中学校医学部設置までの間は裁判医学という名称で、また、明治二十五年までは裁判医学理論という学科名で講義されていたが、明治二十六年から現在の名称になった。」とあります。当時は国内において法医学という学問そのものが目新しく、まさに黎明期にあったと思われます。もしも古畑先生が現代の法医学という学問や、自らが始祖となった金沢大学法医学教室の佇まいを、今現在見ることができたらどのように思われるか興味深いところです。

我々は今後も、予防医学的視点を持った法医学を変わりなく実践し、そのための努力を惜しみません。同窓会会員各位からは変わらぬご指導、ご鞭撻を賜りますよう、何卒お願い申し上げます。

（塚　　正彦：記）

スタッフ

教　授　　塚　　正彦
助　教　　緒方佳代子、阿松　　翔
特任助教　　増田　浩子
技術専門職員　美邉　　暁
事務秘書　　中嶋　浩子
大学院学生1名、医学類MRT学生5名

研究分野の沿革

源流については上述の通りです。大正13年（1924年）に、古畑種基博士が初代専任教授として着任し基礎を築きました。以後、井上 剛、何川 涼、永野耐造、大島 徹各先生方にほぼ間断なく引き継がれ、平成27年（2015年）から第六代教授に塚 正彦が就いています。途中、法・社会環境医学に名称変更がありましたが、現在では初代教授着任時の名称である法医学に戻りました。ご周知の程お願い致します。

呼吸器外科学

教育

医学類教育では「呼吸器学：呼吸器の外科診療」で総論と各論を、「腫瘍学：呼吸器外科学 胸部腫瘍（肺、縦隔）」では胸部腫瘍学について講義を行っています。外科学臨床実習では、必修臨床実習（コア・ローテーション、サブ・スペシャリティローテーション）と選択臨床実習（インターンシップ）を担当し、実際の臨床を体験してもらい、外科に必要な基本手技と呼吸器外科の知識を身につけられるよう講義と実習を行っています。さらに、肺切除・気管支形成、そして胸腔鏡手術をウエットラボで実際に体験してもらい、外科、呼吸器外科の魅力を伝える取り組みを行っています。

研究

①臓器移植・再建・再生、②低侵襲治療、③胸部悪性腫瘍制御、および④新しい手術治療法・検査法の開発、の4本柱で研究を行っています。また、他領域（医学、工学ほか）、企業との共同研究も盛んに行っています。最近では、①グルタールアルデヒド固定を行った自己心膜による気管・気管支再建法を開発しました。また、肺移植における、微弱磁場下または不凍タンパクを用いた臓器保存の研究も進めています。②蛍光物質であるビタミンB2を用いた、肺区域同定法や肺マーキング法、気管支創傷治癒評価法の開発を行っています。③胸部悪性腫瘍進展のメカニズムの解明、新規治療法の開発、予後因子の探索に関して腫瘍内科、呼吸器内科と連携し研究を進めています。④近距離無線通信を応用した肺腫瘍切除マージン画像化システムの開発や保健学類とともに、X線動画装置を用いた呼吸器疾患の病態の低侵襲評価法を開発しています。

診療

呼吸器外科では肺癌（原発性、転移性）を中心に、呼吸器外科疾患全般（胸部感染症、気胸、縦隔腫瘍、漏斗胸など）を対象に、北陸随一の手術件数を有するとともに良好な手術成績をあげています。教室で推進してきた低侵襲手術の開発・工夫は着実に発展しており、ロボット支援下手術や単孔式胸腔鏡手術を積極的に行っています。一方、局所進行胸部悪性腫瘍に対しては、椎骨合併切除や大動脈合併切除などの拡大手術を開発しています。治療に当たっては、腫瘍内科、呼吸器内科、放射線科などの部門と連携し、薬物療法や放射線療法を含めた集学的治療を行い、疾患に合わせた最適の治療を提供しています。最近では、分子標的治療薬や免疫チェックポイント阻害薬を併用し、切除不能と考えられた進行悪性腫瘍でもサルベージ手術を行えるようになりました。また、中心型早期肺癌に対しては、手術治療の他に光線力学療法（Photo Dynamic Therapy）による治療も行っており、治療困難な気道狭窄に対してはステント治療を行っています。

おわりに

教室では「自分が診てもらいたいと思う医師」「世界を視野に入れたAcademic Surgeon」の育成を目指します。教室員一同、金沢大学のさらなる発展のため教育、研究、診療に励んでまいります。十全同窓会の皆さまには今後ともご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

（松本　　勲：記）

スタッフ

教　授　　松本　　勲
助　教　　吉田　周平、齋藤　大輔、
　　髙山　哲也、和田　崇志
医　員　　西川　悟司

研究分野の沿革

1883年金沢医学校の初代外科医長に木村孝蔵が任命され、本学の外科学を開設しました。1902年下平用彩が教授となり、1923年金沢医科大学の発足とともに講座制となりました。1925年石川昇が教授となり、肺結核の外科療法を導入し、本邦初の胸郭成形術を行いました。1938年桂重次が、1941年久留勝が教授となり、1949年に金沢大学医学部外科学第一講座となりました。1954年卜部美代志が教授となり、肺結核に対する肺切除を普及させました。1973年岩喬が教授となり、呼吸器外科の診療、研究が飛躍的に進歩し、1991年渡邊洋宇が教授となり、肺癌の気管支形成術、拡大リンパ節郭清、拡大合併切除の手術術式を開発し、呼吸器外科学が大きく発展しました。2000年渡邊剛が、2015年竹村博文が教授となり講座を受け継ぎ、2020年、外科学再編に伴い呼吸器外科学が独立し、2023年松本勲が初代主任教授に就任し現在に至ります。

支部だより

富山県支部

富山県十全同窓会は昭和50年に設立され、福田博先生、本田幸男先生、広瀬友二先生、篠川賢久先生の歴代会長によって運営が継続されました。その後、一時同窓会活動が低調となりましたが、福田孜先生（前会長）のご尽力によって、平成27年度から総会を開催し、中村信一金沢大学医学部十全同窓会会長のご講演をいただくなど活動を再興し現在に至っています。平成29年度には富田勝郎先生、平成30年度には中村裕之先生のご講演をいただくことができ、ようやく活動が軌道に乗ってきた矢先に新型コロナウイルス感染症パンデミックとなり、この3年間は総会を開催できませんでした。

パンデミックを乗り越え、ANAクラウンプラザホテル富山にて、令和4年度総会を令和5年2月25日に金子敏行幹事の司会にて25名の参加を得て開催しました。泉良平会長の開会挨拶の後、山本健十全同窓会会長からご挨拶をいただき、金沢大学医学部・十全同窓会の現状や、さらに卒業生が同窓会に入会しないなどの問題点が指摘されました。このことは、富山県十全同窓会でも同様であり、会員を増やすための対策が必要であると思います。炭谷哲二幹事による令和4年度事業報告および決算・中間報告、令和5年度事業計画案および予算案については原案通り議決していただきました。総会などの事業を行えなかった間は、会費の徴収を行いませんでした。

講演会は南里泰弘副会長の座長にて、金沢大学大学院整形外科講座教授・十全同窓会前理事長の土屋弘行先生から「整形外科における挑戦と創造」と題する講演をいただきました。土屋教授の素晴らしい研究・手術実績などを拝聴し、母校の素晴らしい発展に胸を躍らせました。昨年11月の日本医師会設立75周年記念式において、日本医師会最高優功賞を受賞された95歳になられる高柳尹立先生から有益なご発言をいただき、先生のご健勝なお姿と凛としたご発言に感動しました。また、福田孜前会長のご出席をいただきました。

鳥畠康充幹事の進行で懇親会を開催し、臼田和生幹事の乾杯の後、久しぶりの懇親にしばし身をゆだねました。山本会長・土屋教授には親しく会員と懇親していただきました。素晴らしい時間を持つことができ、さらなる金沢大学十全同窓会・富山県十全同窓会の発展に努力することを誓い合いました。

（泉　　良平：記）

愛知支部

令和5年6月10日（土）午後4時30分より、第37回支部総会が名鉄グランドホテル18階北京宮廷料理「涵梅舫」で開催されました。

新型コロナが5類移行後の初めての総会となりました。十全同窓会会長の山本健名誉教授、がん研究会有明病院腫瘍精神科部長の清水研先生（平成10年卒業）を来賓としてお迎えすることができました。支部会員21名の参加でした。

水上哲秀先生（昭和47年卒業）の開会のことばで始まりました。この一年で逝去された5名に黙祷をささげました。宮地敏郎先生（昭和19年卒業）、木村肇先生（昭和30年卒業）、横井健先生（昭和30年卒業）、塩之谷昌先生（昭和35年卒業）、西脇太記朗先生（平成7年卒業）のご冥福をお祈り申し上げます。

篠田雅幸先生（昭和51年卒業）の支部長挨拶、会計報告、協議事項・報告と進行しました。

山本同窓会長より近況報告と共に「金澤医学館1期生の集合写真はどこで撮影されたか」と題して、金沢大学医学部の前身である金澤医学館の集合写真をもとに、その歴史を振り返るご講演が始まりました。さながらNHKファミリーヒストリーを観ているような、取材とストーリーでした。改めて母校の歴史と伝統に、身の引き締まる思いでした。企業でも「ブランド力」に価値がありますが、こうした在校生や卒業生の日々の行動の歴史がブランドイメージを形成しているのだと思いました。貴重なお話ありがとうございました。

今回は「生と死～がん患者との対話から学ぶこと」と題して、清水先生よりご講演を拝聴いたしました。先生は腫瘍精神科医としてご活躍で、著書も多数執筆されています。先生の豊富なご経験から、死をみつめ意識することで、改めて生きることの意味や自分の生き方を意識させられる様に感じました。また、日本や世界で活躍する多くの先輩・後輩に大いに勇気づけられる思いでした。

恒例の記念集合写真撮影です。諸先輩方が、椅子やテーブルの移動にフットワーク良くご助力いただき、人間力の高さを教えていただきました。

横田徳久先生（昭和35年卒業）の乾杯のご発声で懇親会が始まりました。以前とは異なり、大皿ではなく銘々小皿での料理提供となりました。コロナ禍でしばらくお会いできなかった先生方とも楽しい時間を過ごすことができました。

最後の恒例の万歳三唱は田中順子先生（平成15年卒業）でした。今回諸事情で参加できなかった先生方も見えましたが、次回はまた多くの皆さまが参集できることを期待しております。第38回も予定されています。皆さまの交流の場として継続して行くためにも、多くの先生方のご参加をお待ちしております。年齢を忘れて、心は学生時代に戻って会話がはずみます。特に、若い先生方のご参加、期待しております。

（岩瀬　克敏：記）

神奈川支部

7月9日（日）、新型コロナウイルス感染症パンデミックで令和１年開催の後、延期を重ねておりました金沢大学十全同窓会・神奈川支部総会を開催することが出来ました。新型コロナウイルス感染症は5月より2類から5類へ移行、社会は共生へ歩み始めましたが、不安が残る折感染対策には留意してのご参加をお願い致しました。

十全同窓会長・山本健先生には金沢よりお越しいただき、また、本年横浜栄共済病院・病院長に就任されました前十全同窓会理事長・土屋弘行先生にもご出席いただき、会員の皆さまには久しぶりに親交をあたためていただく総会となりました。会員277名に葉書で開催のお知らせをして135名より返信をいただき、昭和37年～令和5年の卒業生35名の方にご参加いただきました。

まず、山本健同窓会長のご挨拶では、「十全歴史小話：金澤医学館1期生の集合写真はどこで撮影されたか」をご講演いただきました。

何処で・誰が・どの様な写真を撮影したかについて実証見聞を踏まえたお話を詳しく伺いました。金沢大学医学部創立150周年を記念し2012年7月に建立された「金澤医学館第1期生9名の像：医の源流　未来への継承」の基となる貴重な集合写真の「十全歴史小話」を興味深くお聞きしました。懇親会の席では、この写真館のあった浅野川大橋沿いの今に繋がる思い出話が語られて楽しくお過ごしいただけた様です。

続いて、ご講演は世界を混迷させた新型コロナウイルス感染症パンデミックに鑑み、感染症のお話を企画しておりましたので、十全同窓会員（昭和53年卒業）・杏林大学医学部名誉教授　神谷茂先生より「腸内フローラと感染症～新型コロナウイルス感染症を含めて」をお伺い致しました。

ヒトの体内には細菌が500種類以上、50兆個以上常在し、正常細菌叢（フローラ）を形成している。（ちなみに人間の細胞数は約60兆個ですから驚きです。）腸内に存在する腸内フローラは宿主の正常細菌叢のなかで最も重要なもので、生体宿主に対してエネルギー産生、蠕動運動・消化吸収の促進、物質代謝の調節、感染防御、免疫賦活化、発癌への関与などさまざまな作用をする。

ディフィシル菌感染症（CDI）に対して腸内細菌のバランス失調（ディスバイオーシス）を是正するために有用な細菌投与（プロバイオティクス）の有効性を示す研究成果により、米国食品医薬品局（FDA）は、2022年に糞便移植浣腸剤FMT、2023年に腸内細菌混合経口薬の再発性CDI患者への投与を承認したと言う最新の朗報を伺いました。

COVID-19患者では、腸内フローラは日和見病原菌の増加、有益菌の減少が報告されている。また酪酸産生菌数は病状の重篤度と逆比例し、プロバイオティクスが呼吸器および胃腸症状の軽減に有効であったとの報告があるなど多くの知見を拝聴いたしました。

待望の懇親会は、横浜栄共済病院長・土屋弘行先生のご挨拶と乾杯のご発声で開始され、会員みなさまの近況報告を、爽やかなバイオリン演奏にくつろいでお聞きしました。

総会懇親会の歓談のなかで、次期支部総会に和田隆志金沢大学学長のご講演予定をいただきました。そして、新支部長に北村佳久先生を承認いただきまして、大先輩・岡野慎一先生の中締めのご挨拶で総会をお開きと致しました。

ご参加いただきました会員の皆さま、総会の準備・開催にご尽力いただいた幹事一同に感謝申し上げます。

（若杉　春枝：記）

長野支部

十全同窓会長野県支部総会が令和5年7月15日、長野市ホテルメトロポリタン長野で開催されました。コロナ禍の休止期間を経て、4年ぶりの開催となりましたが、15名の先生方に参加いただきました。

長野県支部は、把握会員数92名からなり、支部長は神村盛宜先生（伊勢宮腎臓内科クリニック）がされています。長野市は金沢からは新幹線で1時間5分と近いものの、長野県は北陸3県くらいの面積があり、北と南では2時間以上かかります。地理的にも一同に集まりにくいのですが、年1回の支部総会には毎年15～20名の先生が参加されています。優秀な先生が多く、信州大学や県内中核病院で重責を担っている先生がたくさんおられます。同窓会員として大変心強い限りです。

今回は十全同窓会長の山本健先生から興味深い「歴史小話」を拝聴し、参加された先生方からは近況報告や昔話の紹介があり、充実した楽しい2時間を過ごすことができました。また神村先生の同期で例年ご参加いただいている田上恵先生には長野県支部総会会員になっていただくことになりました。

2名の若いイケメン内科医（佐久総合病院伊藤泰斗先生、佐久医療センター坂田正悟先生）の参加もあり、内科医として働く私にとっても大変うれしい限りでした。先輩・後輩の絆はいつの時代にも大切です。いざという時にきっと役に立つことでしょう。来年もまた元気にお会いできることを楽しみにしています。

（長谷部　修：記）

出席者（敬称略）
宮下清（昭和31年卒業）、塚田修（昭和47年卒業）、神村盛宜（昭和48年卒業）、田上恵（昭和48年卒業）、山本健（昭和48年卒業　十全同窓会会長）、竹前克朗（昭和49年卒業）、長坂正幸（昭和51年卒業）、田中榮司（昭和53年卒業）、天野俊康（昭和57年卒業）、宮川眞一（昭和57年卒業）、長谷部修（昭和59年卒業）、伊藤研一（昭和63年卒業）、今尾哲也（平成4年卒業）、市川聡裕（平成5年卒業）、伊藤泰斗（平成29年卒業）、坂田正悟（令和1年卒業）

ボストン支部

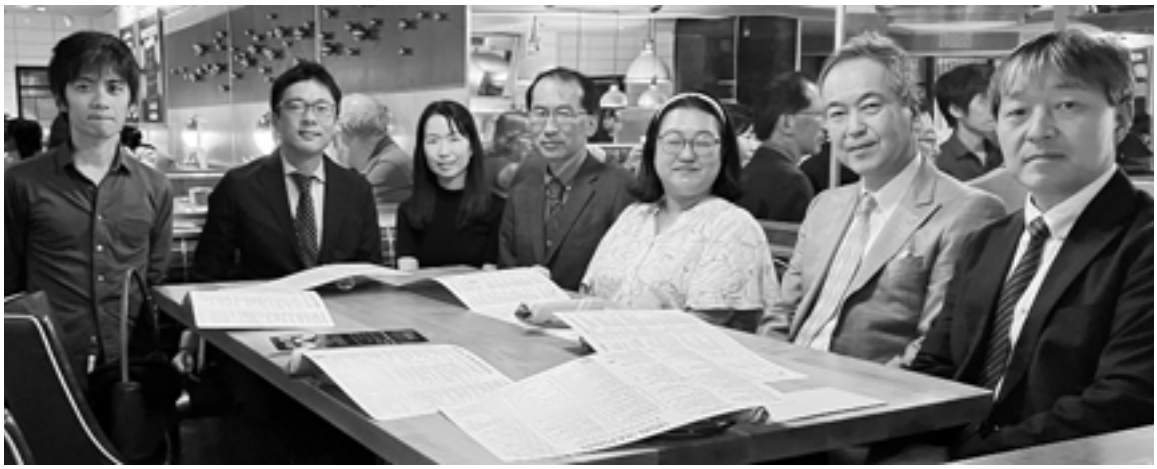
十全同窓会ボストン支部会が令和5年7月28日（土）、米国マサチューセッツ州ボストン市内のレストランLegal Sea Foods（Park Square）で開催されました。今回は、金沢大学と米国との交流を今後さらに促進する目的でボストンを訪問中の和田隆志学長（昭和63年卒業）、山本靖彦（平成4年卒業・学長補佐・血管分子生物学教授）、林宜仁教授（学長補佐・理工研究域物質化学系）、安藤博国際部長、川西真衣子さん（人間社会系事務部学生課大学院・留学支援係）との交流と情報交換の場として開かれました。

金沢大学医学部十全同窓会ボストン支部は、ボストン在住者や留学中の十全同窓会会員の交流の場として、さらに、金沢大学在学生や十全同窓会員のボストンへの訪問によるネットワーク構築や情報交換の場として機能しているものです。また、医学部・医学類出身以外の金沢大学卒業生もひろく含めた金沢大学同窓会ボストン支部としての役割も果たしています。ボストン在住の広瀬竜夫先生（昭和36年卒業）が永年にわたり支部長としてまとめ役を担ってこられましたが、現在は、Haruka M Badger先生（旧姓・馬渕晴佳先生、平成13年卒業、Primary Care Physician, Brigham and Women's Hospital）が支部長を務められています。そして、Brigham and Women's Hospital & Harvard Medical School に現在留学中の山村雄太先生（平成22年卒業）も参加され、総勢7名の盛会となりました。ボストンでは、2019年にBrigham and Women's HospitalとMassachusetts General Hospitalが、Mass General Brigham（MGB）として経営管理組織が合体した形で、職員8万人規模、そして、現在2,700を超える臨床研究を推進する世界最大級のバイオバンクを有する病院となっています。今回の和田学長のボストン訪問の目的の一つは、このMass General Brigham（MGB）と金沢大学が今後協力関係を築き、金沢大学の研究推進と次世代人材育成をさらに推進するためです。加えて、Harvard Medical Schoolとの部局間交流協定の締結への準備、総合大学である金沢大学の今後の医工連携も見据えたHarvard University との研究交流準備、そして、これまで金沢大学とスーパーグローバル大学（SGU）創成支援事業でのパートナー校でもあるTufts Universityへの公式訪問もその重要な目的でした。今後の国際共同研究に資する重要な建設的な意見交換ができた有益なボストン訪問となりました。

今回のボストン支部会の冒頭、Haruka M Badger支部長からの開会のご挨拶の後、和田学長から金沢大学の現状や今後の国際展開戦略などについてお話しいただきました。ボストン滞在のお２人の先生方からは、長かったコロナ禍での社会状況変化、ボストンでの生活環境や子育てのこと、現地の医療体制、ラボでの研究進捗状況などについてお話しを伺い、歓談のひと時となりました。そして参加者一同、ニューイングランド地方のシーフードを堪能しました。

今回の参加者は写真（下）左から、山村雄太先生、安藤博部長、Haruka M Badger支部長、林宜仁先生、川西真衣子さん、和田隆志学長、山本靖彦です。これまでのコロナ禍の影響もありまして、金沢大学からの派遣留学生数も減少し、ボストン支部の会員数は少なくなってきています。今後、ボストン周辺への留学や訪問などお決まりの方がいらっしゃいましたら支部長までご連絡をお願いいたします。最後になりましたが、十全同窓会ボストン支部会開催に当たりまして、ご支援をいただきました同窓会本部事務局に御礼申し上げます。また、今後益々の十全同窓会ボストン支部のご発展を祈念いたします。

（山本　靖彦：記）



医学展2023

日時／令和5年11月4日（土）、5日（日）
場所／医学類キャンパス

今年度の医学展の実行委員長を務めさせていただくことになりました医学類5年の川合育美です。今年度は4年ぶりの開催です。医学展の歴史は古く、1952年にさかのぼります。この歴史ある医学展を途切れさせてはいけない、後輩に残していきたい、その思いで今回実行委員長に立候補させていただきました。

今年度は11月4日、5日の開催となります。県内でもさまざまなイベントが再開されております。その中で、医学を学ぶ私たち学生が主催する医学展を再開することで、ご来場の皆さまに朝日のように希望と元気を届けられるのではないかと考えました。そして、そのような医学展を目指し、2023年度医学展スローガンを「夜明け」とさせていただきました。

3月から準備を進め、現在も開催に向けて医学展実行委員と医学類5年生、そして医薬保健学域の学生が協力しております。しかし、4年ぶりということもあり、過去資料の紛失や医学展経験者が少ないことによる情報の不足、そして協力企業の協賛金がなかなか集まらないことによる資金不足等多くの課題があります。経験も能力もない私だけではここまで準備を進めることはできなかったと強く思います。才能にあふれる実行委員のみんなや、実習で忙しい中で助けてくれた5年生のみんなの力があってここまで準備ができました。そして、期間が空いてしまったにもかかわらず協力してくださった企業の方や支援をくださった方々の存在にとても支えられています。医学展を通して人の優しさに触れ、ゼロからイチを作ることや協力して一つの物を生み出す難しさを学び、自分自身の成長へとつながったと感じております。そしてこの経験は、将来自分が医師として働くときにも大切になるものだと思いました。開催まであと数カ月となりましたが、関わってくださった皆さまへの恩返しができるような最高の医学展にしていきたいです。

最後に、十全同窓会の皆様方には多大なご支援ご協力をいただきありがとうございます。実行委員一同、厚くお礼申し上げます。当日は、子どもから大人まで医療を身近に感じ楽しめるような企画やステージ、美味しい模擬店や黒川清先生の講演など盛りだくさんとなっております。お時間が合いましたら、ぜひ足を運んでいただければ嬉しい限りです。皆さまにお会いできることを楽しみにしております。

（金沢大学医学展2023実行委員長
川合　育美：記）

クラス会

昭和55年卒業生同窓会

2023年度金沢大学医学部昭和55年卒業生同窓会が令和5年8月26日（土）、金沢犀川温泉 川端の湯宿 滝亭で開催されました。私たちの同窓会は2年に1回、北陸三県と関東、関西の在住者がもち回りで幹事を務める約束になっています。2014年は関東の当番、2016年は石川の当番、2018年は福井の当番で開催されました。本来であれば2020年、ここ滝亭で同窓会を開くことになっていましたが、新型コロナウイルス禍のため延期を余儀なくされ、今回満を持しての開催となったのです。

今年の北陸の異常な暑さは、広く全国に報道されました。小松で40℃近くまで気温が上昇したことは「北陸は北国で寒い」と思い込んでいる他の地方の人たちには驚きであったようです。滝亭は金沢の中心からそう遠くない場所にあります。しかし、犀川の川沿いにあって緑に囲まれているため心なしか涼しく、ミンミン蝉の鳴き声があたり一面に降り注いでいました。従業員の方に迎えられて玄関を入ると幹事の上田君、大野君越田君が迎えてくれました。

私たちは昭和55年の卒業ですから、留年しなければ入学は昭和49年（1974年）です。その当時まだ学園紛争は終結しておらず、あの独特の字体、いわゆるゲバ字で書かれた看板が金沢城内のキャンパス内に立て掛けられていました。教養部の窓から下を見ると「中間試験阻止！」などと叫びながらヘルメットをかぶり、鼻から下をタオルで隠したいで立ちの一群がゲバ棒を振っていました。試験中止はまんざらでもないナ、などと思いながら眺めていた覚えがあります。

入学時には無料であった兼六園が有料化されたのは昭和51年（1976年）です。香林坊でたまに一杯やった後に兼六園を通って小立野へ帰ることができなくなりました。入学当時、西は小松ICと丸岡IC間しか開業していなかった北陸自動車道は、卒業直後の昭和55年（1980年）4月7日に敦賀ICと米原JCTがつながり、名神高速道路まで全線開通しました。私たちは、まさに激動の6年間を金沢で過ごしたことになります。

そんな私たちにとって同級生でありながらお兄さんのような、また時にはお父さんのような存在であった山上文良さんが、闘病の末この2月に逝去されました。入学時には既に26歳であった山上さんは、その年齢を理由にクラス代表に選出され、以後は名実ともに私たちの代表としてリーダーシップを発揮してくださいました。「今日は思いっきり楽しくやろう。山上さんはきっと喜んでくださる」みんなそう思ったに違いありません。

手術を終えて駆けつけてくれた下崎君の音頭で宴会が始まりました。遠方の関東からは北村君、神林君、小清水君、高畑さん、それに私が参加しました。関西からは奥野君が参加。北陸を離れても、みんなそれぞれ幸せに暮らしています。

そのうちに、北陸のお酒が酌み交わされ始めました。席を移動しての会話が弾みます。まだ医育機関で活躍している人。病院の経営に携わっていて頭が痛い人。退職後新たな医療機関に勤務し、そこでも元気に働いている人。もう十分に働いて悠々自適の人。息子さんが医師になり、一緒に手術をしている人。息子さんが近々開業し、自分の患者さんを引き継いでくれる見込みの人。さまざまな人生模様を伺えました。

潮木君、桐山君は学生時代と全く変わっていない。梶原君や沼田さんはかえって若返った？古田君に至っては入学時と変わっていない！村本君、南里君、紺井君、宮崎君は良い意味で貫禄たっぷりに。新田君は、ダンディさに磨きがかかった感じ。林君は改めて母校愛を切々と。幹事と一緒になってきめ細やかに心を遣うのは横山君。少々歳をとっても根っこは昔のままだと感じました。

宴会が修了して二次会へ。ラウンジで軽いおつまみとともにお酒をいただき、話が尽きぬまま夜は更けていきました。同級生って、本当に良いものです。上田君、大野君、越田君の完璧な幹事に感謝し、2年後の関西での再会を誓いました。

（大村　健二：記）

前列左から　越田潔　大野高史　北村佳久　沼田三枝子　高畑玲子　下崎英二　南里泰弘
中列左から　梶原壮平　大村健二　宮崎幹也　村本弘昭　横山仁　古田寿一　紺井一郎
後列左から　小清水正人　神林清作　奥野裕康　桐山正人　林洋司　新田俊一　上田幹夫　潮木保幸（敬称略）

昭和58年卒業生同窓会

2023年8月5日（土）～6日（日）、金沢の奥座敷「滝亭」で、昭和58年卒の同窓会が開催されました。2020年、前回（2017年）から3年経過し、「そろそろ同窓会を」と声が上がったものの、コロナ禍で延期、また延期となり、ようやくこの夏の開催にこぎつけました。滝亭さんには、「来年は必ず行いますので、すみません・・・」と繰り返しのキャンセル、次年度の再予約の電話を入れるたびに、気持ちよくご対応くださったばかりか、逆に励ましまで頂戴しました。幹事の不手際で、最終ご案内はがきの投函が今年６月になってしまい、しかも参加申し込み（or欠席）のアドレスの記載ミスで、ご迷惑をおかけしてしまいました。それでも、記載ミスを責められるどころか、メールが繋がらないのでと、電話や丁寧なお葉書を何通もいただきました。ご欠席の連絡に加えて、近況の報告が書かれていたりしてほっこりとノスタルジックになったり、気持ちは繋がっていると安堵したり、結果、ほとんどの同級生から何らかの形で、参加の可否のご連絡をいただきました。

離れの10部屋を丸ごと予約してありましたが、最終的には40人近くのご参加がありました。順延、順延であまり意識していませんでしたが、気づいてみたら卒後40年。勤務医はそろそろ最終段階に差しかかっていることもあり、多くが基幹病院の管理職、また開業医も大きな信頼を担って地域医療の中核となっていました。宴席は、司会の松下栄紀先生の挨拶で開宴、前回以降にご逝去された齋藤研一先生など、物故者に黙とうを捧げた後、蒲田敏文先生の音頭で乾杯。続いて順に、近況報告となりました。見かけ上の変化は様々（若返った方も）でも、中身は40年前の面影は変わっていなくて、大笑い多々でした。気兼ねなく過ごすことができる居心地の良さ、何かしら頼りになる繋がり、これからも大切にしていきたいと思いました。

二次会は、地酒や、のとワインのサービスが提供されている宿のラウンジに移動、くつろぎのスペースで、いくつかのテーブルでゆったりと昔と今の話、盛り上がりました。さまざまな立場で新型コロナ対応に追われきた同志を労い、母校の状況を探り、現行の仕事にまだまだ活かせる同級生ネットワークの確認。また、介護保険の資格証が届いてがっかりしたとか、年金は貰えるうちに貰っておいた方がいいとか、年齢相応の現実的な話題から、病院長諸氏の苦労話、ご欠席の方々の消息、安否・・・、深夜まで和やかな会話は尽きませんでした。

一夜限りの同窓会、のんびりとできました。次回は多くの同級生がいらっしゃり、アクセスのいい「東京（関東方面）で開催！」と再会を約束して、各々帰路につきました。

同窓会事務局山岸さまはじめ、お世話になった全ての皆さまに感謝申し上げます。

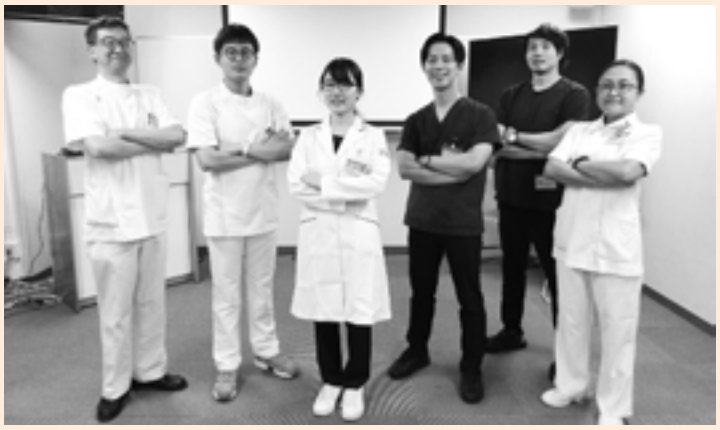
（越田　理恵：記）

参加者：石田浩、石田文生、宮崎あゆみ、笠原善郎、蒲田敏文、川原範夫、川本潔、菊地豊、黒岡雄二、小濱隆文、佐藤士郎、佐野正登、齋藤勝彦、酒井康一郎、笹川寿之、佐々木正寿、里村吉威、竹川茂、土屋美津保、立花修、津川喜憲、土屋弘行、富田寛、富松功光、中川俊信、仁平武、長谷川光広、布施春樹、藤村隆、古川幸夫、堀本孝士、松下栄紀、越田理恵、薮下和久、山田秀治、三木秀樹、吉田豊

幹　事：竹川、土屋、松下、山田、越田

金沢大学医学生と「生と死」を考える：麻酔科蘇生科での緩和医療実習の報告（その9）

金沢大学附属病院麻酔科蘇生科（緩和ケアセンター）
山田　圭輔



写真：医学生と緩和ケアチームスタッフ
筆者、田中、泉、二木、堀内（麻酔科蘇生科）、佐伯（専門看護師）

金沢大学医学類5年生の緩和医療臨床実習では、「これまでに人の生と死を考えさせられ、深く共感した書籍、映画、芸術、自分の経験などを1つ選び、人は死までをいかに生きることができるか、医療者はどのような支援ができるかに関する自分の考えを皆に紹介しなさい」という課題を与えています。本稿では、令和4年度5年生3名（二木翼君、田中雄大君、泉里奈さん）のレポートを作成します。

1）1984年（ジョージ・オーウェルのディストピア小説）

臨床実習を経験してきた中で、悲惨な症例を目の当たりにしたり、最終段階の患者さんにもお会いしました。その時々でそれらの方々に寄り添おうと思うのですが、自身の防御反応のためなのか、患者さんの気持ちを考えることや感情を受け入れることは実際にはとても難しいと感じてきました。おそらく前もって想像して、訓練することが必要なのだと思います。

私は表題の作品で、苦境の中にいる患者さんの気持ちを想像することができました。「不意に自分の肉体を哀れむ感情がどっと押し寄せ、思わず感極まってしまう。自分が何をしているのかも分からぬまま、彼は小さな椅子に崩れ落ち、泣き出していた」のように、変わり果ててしまった主人公の描写がとても印象的でした。

痛みやさまざまな身体症状が生じると、時間の流れ方や思考の道筋が健常時と違うようになる可能性がある。医療者からすると、起こりうる症候に過ぎなくても、当人にとっては感情も行動も大きく揺さぶられることになる。このことを認識したうえで、認識していることを患者さんに示し、共感して傾聴すること、寄り添うことが重要だと考える。小説でもアニメでもドラマでもさまざまな作品に触れることで、患者さんの苦境をできるだけ鮮明に想像できるようにする努力は、医療者に取って有用なのだと考えました。

2）小説家的思考のCare

病棟で聞いた「あの患者さんは心配性だから」との言葉は、私に悶々とした日々を過ごさせた。しかし、なぜこの言葉が私の心を掻き乱したのか、うまく説明できなかった。手懸りを求めて、私の高祖父である幸田露伴の死に行く様を、娘の幸田文が記した随筆「父」を開いた。後書きによると、医師による診療録だけでは露伴の死を理解するには物足りないと感じ、執筆に至ったことが綴られていた。私もまた、同じような虚しさを覚えていたのだと気がついた。

死に対する職種として、医療者、聖職者、小説家等がある。小説家は、その人の生き方に関して膨大な調査と構想を行った後に物語を展開することで、その文脈での死に際の感情を提案する。一方で医療者は、死に際の状況のみから他者の感情を近視眼的に断定してしまっているかもしれない。小説家のように、膨大な背景を調査し、人生の流れを把握しなければ、患者の感情を正しく理解することは難しいのだ。

現代医学はその発展とともに数多の人々を救ってきたが、誰しも最期はその大きな手から零れ落ち、独りで死を前にする。死と孤独に対峙した患者の感情に立脚し、自らの小さな手で包容することこそが、死にゆく人に接する医師の本分ではないだろうか。現代医学のCureと小説家的思考のCareを兼ね備え、患者の最終章を共に書き上げられる医師になれるよう精進したい。

3）飛鳥へ、そしてまだ見ぬ子へ（井村和清、祥伝社）

1979年に32歳の若さで亡くなった医師の井村和清さんが残した手記である。31歳で右膝に骨肉腫が見つかり右下肢を切断したが、翌年には両肺転移を生じてしまう。それでも彼は死の1カ月前まで勤務を続けて患者さんに寄り添い、残される子ども達と妻、両親へのメッセージを書き続けた。

彼は、医師であり患者でもある立場から、医療者の患者への接し方について述べており、健康な人のモノサシで患者さんの心を測ってはいけないと強調している。医師になりたてのころ、文句ばかり言う患者に辟易して上級医に訴えると、このように返されたという。井村氏自身が下肢切断術後の痛みの激しさを担当医に訴えても、「そんなに痛いはずはないんだけどなあ」と言われたこともあった。

患者にならないとその辛さはわからないが、医療者全員が患者になれるわけではない。しかしながら医療者は、他者の人生の大事な局面に立ち会い、ひとりひとりから生き方を学ばせてもらえる機会に恵まれている。他者の気持ちを完全に理解できないことを自覚したうえで、どう寄り添うかをブラッシュアップしていくことが必要なのだと思う。

医療者同士で「生と死」を考える：オンライン講演会の紹介

金沢大学附属病院麻酔科蘇生科（緩和ケアセンター）
山田　圭輔

後列：佐伯、清水、小倉（金大病院緩和ケアセンター看護師）
前列：丸山（血液内科）、筆者、伊川

緩和医療の臨床では生と死が交差するさまざまな場面に立ち会うことになり、医療者であっても感情が乱れ、虚無感に捉われてしまうことがある。筆者は、医療者が生と死について話し合うことが大切だと考え、1）卒前教育として、医学生と「生と死」を考える実習、2）卒後教育として、医療者同士で「生と死」を考えるオンライン講演会を継続してきた。

2023年2月に2回開催したオンライン講演会では、金大病院小児科准教授の伊川泰広先生（平成14年卒業）（写真）と、本邦のホスピス緩和医療のパイオニアである淀川キリスト教病院名誉ホスピス長の柏木哲夫先生に、自身の体験を基に「生と死」について話してもらった。二人の講演要旨を紹介する。

1）小児科医が子どもの死と向き合うこと（伊川泰広）

小児科医が子どもの死と遭遇する機会は非常に少ない。そもそも子どもの死は稀であり、重症疾患を取り扱う大学病院以外で子どもは亡くならないからである。私は小児血液悪性腫瘍学が専門であり、子どもの死に遭遇する機会は比較的多い。それでも看取った子どもの数は21年間で22人である。

我が子の死を迎える両親は、経過中にさまざまに葛藤し、その受容に時間を要する。小児科医は難治性疾患と対峙した際、いつまで、どれだけ治療を施すことが患児そして家族にとって最良なのか、答えのない悩みを抱えながら子どもの死を迎えることになる。

一般的なグリーフケアは死後における家族への支援とされる。しかし「家族にとってのグリーフケア：医療の現場から考える」の著者である坂下ひろこさんは、「肝心なのは患者の生前や闘病中に、患者と家族のために手を尽くす医療行為そのものと、関わる医療者のあらゆる人間的配慮が、結果的に死別後の痛烈な悲嘆を根底で支えていく。」と述べている。すなわち日々の診療にグリーフケアが内在されているのだ。

患児や家族と濃密な時間を過ごす医療者にとっても、患児の死は限りなく我が子の死に近くなる。小児科医は1年に1人しか経験しない子どもの死に慣れることはない。慣れない死を毎年受容することは容易ではなく、医療者にとってのグリーフケアも考えなければならない。医療者同士で自由に話し合えることが必要だが、そのような機会は殆どない。今回このような素晴らしい機会を与えて頂き、山田先生はじめ緩和ケアセンタースタッフに感謝申し上げます。

2）良き生、良き死：最期の跳躍（柏木哲夫）

ホスピスで約2500名の患者さんを看取り、終末期のケアを通して多くのことを学んだ。その中で明確に感じたのは「人は生きてきた様に死んでいく」ということである。周りに感謝して生きてきた人は、家族や我々スタッフに感謝しながら死んでいく。周りに文句を言いながら生きてきた人は、家族やスタッフに文句を言いながら死んでいく。

しかし時々「最期の跳躍」をする人がいる。57歳のAさんは胃癌終末期状態で入院された。文句の多い人であった。我々のケアにどこか問題があるのかもしれないと思い、奥さんと話をした。奥さんは「あの人はずっと文句の多い人なのです。ここでのケアはとても良いので満足しています」とのことだった。日常のケアに対して彼から「ありがとう」という言葉を聞いたことがなかった。周りに文句を言いながら生きてきた人は、やはり文句を言いながら死んでいくのだなと思った。

しかし、そうではなかった。彼がほとんど寝たきりの状態になったある日に、受け持ちナースが「Aさんに何かあったのですか？お薬を持って行ったら「ありがとう、世話になるなあ」と言われたのです！わたし、びっくりして、何も言えずに部屋を飛び出して来たのです！」と駆け込んできた。私もびっくりした。彼の口から「ありがとう」という言葉が出るなんて信じられず、すぐに病室に行った。彼はいつもより穏やかな顔つきで、「だんだん弱ってきて、死が近いなあと感じました。ぼっーと天井を見ていたら、これまでの人生が思い出されて、随分いろんな人にお世話になったと思いました。反面、私は周りの人たちに感謝もせずに文句ばっかり言ってきたなと思いました。そして、まず、お世話になった看護師さんに、ありがとうを言いました」と話してくれた。

私はAさんの変化を「最期の跳躍」と名付けた。その日の夕方には奥さんが「主人に何かあったのですか？私に『世話になったなあ、ありがとう』と言ったのです！」と驚いていた。人は生きてきたように死んでいくというのは大原則である。しかし、しっかりとした症状コントロールと傾聴を基本とした真摯な関わりは「最期の跳躍」に結びつくことがあることを忘れないようにしたいと思う。

キャンパスビジット2023（オープンキャンパス）

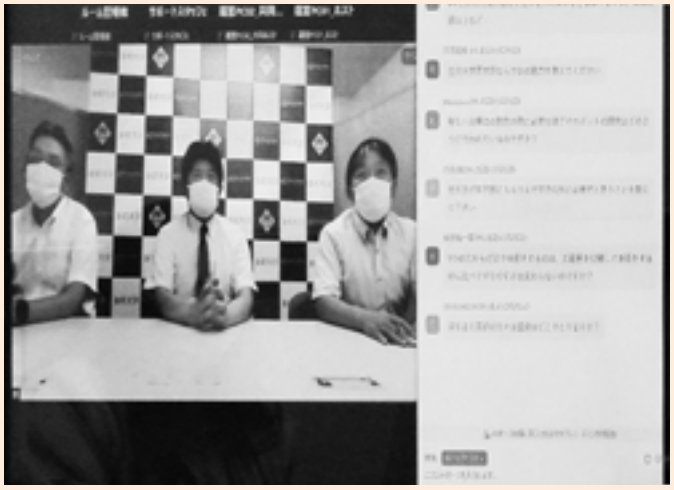
春季対面型キャンパスビジット
日程／令和5年5月27日（土）
場所／十全講堂ホール

夏季Webキャンパスビジット
日程／令和5年8月9日（水）、10日（木）
（リアルタイム配信）

令和5年度のキャンパスビジットも、医学類への進学を積極的に考えている高校生、高卒生を対象に、上記の日程で行われました。春季対面型では109名の参加があり、杉山和久医学類長のご挨拶の後、山本靖彦教育委員長（入試・学生募集・高大院接続・大学院改革担当学長補佐）による学類紹介が行われ、その後、医学類2・3年生5名にも参加いただき、質疑応答・懇談会が原田の司会で行われました。この質疑応答・懇談会は医学類生・教員が個別に質問に対応する形式で行っており、例年好評を得ている企画です。夏季Webキャンパスビジットでは、全学類共同で開催され、Web特設サイトにおいて多数の一般公開動画に加え限定動画も公開されました。リアルタイム配信日には学類紹介、模擬講義、入試・学生生活・留学相談会などが実施され、医学類では模擬講義として、1日目は宮本敏浩教授による「白血病の最新治療」、2日目は松本勲教授による「最新の呼吸器外科手術を学ぼう」が配信されました。チャットには講義内容のみならず金沢大学の魅力や大学生活に関する質問が多数寄せられ、宮本先生、松本先生、山本教育委員長にご回答いただきました。2日間で約300名のご参加があり、多くの高校生に金沢大学医学類の魅力を知ってもらうことができたと思います。

キャンパスビジットは、優秀で意欲の高い学生を集めるためには必要不可欠なイベントと考えています。すばらしい同窓生の輩出につながるよう、今後も工夫、尽力していく所存です。

（原田　憲一：記）



医学教育研究寄附金

ご寄附をいただきました。
本学類、系が行う教育・研究にご賛同賜り、深くお礼申し上げます。

本多　博一
（平成10年卒業）

お詫び

会報184号掲載「令和5年3月卒業者進路」に一部不適切な表記がございましたことをお詫び申し上げます。

第17回金沢大学ホームカミングデイ開催

今回で17回目となる、「金沢大学ホームカミングデイ」を10月28日（土）に開催いたします。

今年は例年実施しているキャンパス見学会に加え、本学が持つXR技術を駆使し、旧城内キャンパスを再現したヴァーチャルキャンパス見学会をご準備しております。

金沢大学ホームカミングデイ当日は、角間キャンパスにて「第60回金大祭」（10月28日（土）～10月29日（日））の開催期間中であり、さらにキャンパス内では各種催しや展示等を自由にご覧いただけます。また、金沢城公園では写真展「あのころの金沢大学」を開催いたします。

歓迎式典、特別講演及び懇親交流会（参加費無料）は、４年ぶりの制限のない開催を予定しております。金沢大学のこれまでの歴史、現在、そして未来を味わっていただける場をご準備しております。

ご家族や同期生、サークル仲間の皆さまとご一緒に、紅葉の金沢へどうぞお越しください。基金・学友支援室ホームページに、開催情報を掲載しています。

◎参加費：無料
◎申込み締切：9月29日（金）
◎申込み・プログラム等の詳細は下記へお尋ねください。

【金沢大学基金・学友支援室】
TEL　076−264−5075
FAX　076−234−4010
メール
gakuyu@adm.kanazawa-u.ac.jp

昨年の第16回ホームカミングデイの様子
（3年ぶりの開催となった懇親交流会）

留学体験報告・課外活動報告の学生諸君

卒業生の皆さまを歓迎するフラワーアート

寄附制度のご案内（金沢大学医学教育研究支援寄附金）

近年、国立大学法人の改革強化・促進が国の施策として急速に進められる中、医学類・医学系においても、実施すべき事業が次々と生じております。本来ならば、これらの事柄は大学の予算により実施すべきところですが、昨今、本学の財政状況は逼迫しており、部局に対して十分な予算措置が行われない状況です。

医学類・医学系としては、自助努力の方策を模索せざるを得ず、その一環として、平成26年９月に本学類・系が行う教育・研究に役立てることを目的とした≪金沢大学医学教育研究支援寄附金≫を起ち上げ、支援事業を推進して参りました。

本学の医学教育研究のさらなる充実発展のため、同窓会会員の方々におかれましては、今後とも格別の御支援を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

金沢大学　医薬保健学域医学類長
医薬保健研究域医学系長
杉山　和久

【担当（お問い合わせ先）】
〒920-8640　金沢市宝町13-1　医学類Ｂ棟1F
金沢大学医薬保健系事務部会計課経理係
Tel：076-265-2115　E-mail：t-keiri@adm.kanazawa-u.ac.jp

【お申込方法について】

- 電子メール又は電話でのお申込み
  上記担当まで電子メール又は電話にてご連絡ください。折り返し、申込書を送付させていただきます。現金のお持ち込みにより、ご寄附いただくこともできますが、その場合も上記方法によりあらかじめご連絡いただけますと幸いです。

【税法上の控除について】

- 寄附者が個人の場合は、所得税法上の控除対象となる寄附金として、確定申告の際、所得から控除され、税法上の優遇措置を受けることができます。また、石川県内在住者の寄附は、石川県や県内市町村からの個人住民税の控除を受けることができます。（※所得税法、地方税法ともに２千円を超える寄附額から控除対象となります。）
- 寄附者が法人の場合は、法人税法上の全額損金算入が認められる寄附金として、法人の所得から控除でき、税法上の優遇措置を受けることができます。

連絡先の変更・ご異動の際は、金沢大学医学部十全同窓会会員情報変更サイトをご活用ください

URL　http://juzen-ob.w3.kanazawa-u.ac.jp/member

会員情報変更はこちら

ご不明な点は下記事務局へご連絡ください。

TEL：076-265-2132
Email：juzen@med.kanazawa-u.ac.jp

会費納入のお願い

同窓会事業は皆様からの会費により支えられています。
会費納入にご協力くださいますようお願い申し上げます。

会費納入方法をお知らせいたします。
年額4,000円

①自動引き落とし（手数料本会負担）

お手続き希望の方はご連絡先を事務局宛にお知らせください。
折返し「銀行口座自動振替手続きの書類」をお送りいたします。
是非この機会にご検討くださいます様お願いいたします。

②銀行ネット決済（ネットバンキング）

下記銀行口座へ直接お振り込みが可能です。
（お振込の際は、**ご氏名の前に会員番号のご入力**をお願いいたします）
北陸銀行　小立野支店
普通預金　６０５１０４７　金沢大学医学部十全同窓会 会費口

③払込用紙（手数料本会負担）

従来通り同封の「払込取扱票」をご利用ください。
＊ゆうちょ銀行は2022年1月より手数料を新設しました。
現金による払込みにつき、1件ごとに110円の手数料がご依頼人にかかります。

問合せ先

金沢大学医学部十全同窓会事務局
TEL：０７６－２６５－２１３２　FAX：０７６－２３４－４２０８　Email：juzen@med.kanazawa-u.ac.jp

nihon medi+physics

SPECT 診断 PET
核医学
治療 医療機器

明日の幸せを願い、「診る」そして「治す」核医学。

私たちは、がんや心臓病、脳血管疾患および認知症などの早期発見に役立つSPECT・PET検査用放射性医薬品や、がん治療用の医療機器、治療薬などの創出を通じ、これからも皆様の健康に貢献します。

〒136-0075 東京都江東区新砂3丁目4番10号 TEL (03) 5634-7006 (代)
https://www.nmp.co.jp/ 日本メジフィジックス株式会社
2023年4月作成

ホテル日航金沢

城下町・金沢を彩る"舞台"という発想のホテルです。
地上30階、高さ130mは北陸一のスケールを誇り、多彩で充実した施設と
きめ細やかなおもてなしで皆様をお迎えいたします。

一期一縁のおもてなし。

〒920-0853 石川県金沢市本町2-15-1JR金沢駅兼六園口前
Tel:076-234-1111　Fax:076-234-8802
ホテル日航金沢　検索　www.hnkanazawa.jp

会報編集委員の紹介

学内編集委員（14名）

蒲田　敏文
中村　裕之
横山　　茂（副編集委員長）
絹谷　清剛（編集委員長）
佐々木素子
篁　　俊成
和田　隆志
杉本　直俊
谷口　　巧
山本　靖彦
中田　光俊
倉知　　慎
毎田　佳子
濱口　儒人

学外編集委員（21名）

山口　成良
佐藤　　保
三輪　晃一
橋本　琢磨
中村　信一
勝田　省吾
山本　　健
山本　　博
山岸　正和
太田　哲生
大村　健二
横山　　仁
大島　　徹
横山　　修
中本　安成
高村　博之
常山　幸一
古川　健治
古市　賢吾
若山　友彦
中西　清香

以上35名で構成されています。

表紙の写真

医学図書館のブックラウンジ

医学図書館1階にある吹き抜けのブックラウンジは開放感のある空間です。グループ学習ができるオープンスタジオや一人で集中できる研究個室、グループスタジオや自習室など、図書館には学習スペースが充実しています。

題字：山本　　健（十全同窓会会長）

発行：**金沢大学医学部十全同窓会**

会報編集委員会
〒920-8640　金沢市宝町 13-1
http://juzen-ob.w3.kanazawa-u.ac.jp

発行日：令和 5 年 9 月 30 日

印　刷：能登印刷株式会社

会費納入のお願い

同窓会事業は皆さまからの会費により支えられています。
十全医学会とは別組織であることをご理解ください。

編集後記

現在、全国の医学部医学科では、医学教育改革が急速に進められています。その背景として、⑴73年ぶりの医師法第11条と第17条の改正（令和3年5月21日成立、令和5年4月1日施行）による共用試験［CBT（Computer Based Testing）と臨床実習前OSCE（Objective Structured Clinical Examination）］の厳格実施、つまり実質的な国家試験化、そして、実践的な診療参加型臨床実習（医学生の医業の実施も）への完全移行、⑵医学教育モデル・コア・カリキュラムの改定（令和4年度版）、⑶日本医学教育評価機構（JACME）による医学教育分野別評価（いわゆる国際認証評価）による客観的評価実施（本学は令和3年度に受審し、令和4年10月1日から令和11年9月30日までの適合認定）、⑷卒後医師臨床研修制度の改善と見直しなどがあり、このような激しく変化する潮流に対応するためです。金沢大学医学類でも、順次対応し、むしろ、時代に先行するような先駆的な取り組みをいち早く取り入れるように日々見直しと改革を行っているところです。

このような中、令和4年度末に大学本部にもご支援をいただき、「金沢大学医療人材教育研究センター」を新設することができました。これまでの医学教育研究センター、附属病院研修医・専門医総合教育センター、附属病院看護部・薬剤部、薬学系・保健学系の教務関係の先生方が連携協力し、シミュレーター教育、DX教育、リカレント教育、多職種連携教育、模擬患者の養成、FD・SD活動、そして、他大学・他医療機関との連携も推進していく組織になります。今後も、卒前卒後のシームレスな医療人材教育、人材育成の質の保証に一致団結して努めてまいります。十全同窓会の会員の皆さま方にもご理解とご協力をよろしくお願い申し上げます。

（山本　靖彦：記）